# 古川市宮沢遺跡

- 化女沼ダム建設関係 -

昭和60年3月

宮城県教育委員会

化女沼は古川市の北部に発達した宮沢丘陵の低地に自然滞水した周囲4kmほどの沼である。 むかしこの地に長者が住んでいて、その娘がこの沼で化粧したので化女沼の名が生じたという。 そのほかにも数々の伝説があり、古川市民にとってふるくから親しんできたロマンの地である。 沿岸の湿原植物とそこにあつまる昆虫類・鳥類などは学術上貴重なものという。また、付近に は宮沢遺跡をはじめ多数の文化財が分布している。

宮城県は田尻川流域に潅漑するために、化女沼にダムを築くことを昭和52年から計画し、現在進行中である。今回は化女沼ダム建設用の道路予定地が宮沢遺跡の北東部を通過することになったため調査を実施した。宮沢遺跡は1km四方におよぶ古代の大きな城柵遺跡で、その一部が昭和51年に国の史跡に指定され、今年度から古川市教育委員会によって環境整備がはじまったが、未調査の部分が多く、まだまだ謎に包まれた実態不明の城柵である。今回の調査では、外郭線施設や内部施設が予想以上に発見されたので、未調査の外郭線に囲まれた地区全体に古代の施設がかなり濃密に分布すると予測された。したがって私たちは宮沢遺跡を正しく理解できるよう努力し、周囲の自然的・歴史的環境とともに適切な保護につとめなければならない。

現地の調査や協議にあたって、宮城県土木部水資源開発課・古川土木事務所化女沼ダム事務 所・古川市教育委員会の皆様から大変お世話をいただき感謝申し上げる。

昭和60年3月

宮城県教育委員会 教育長郷古康郎

# 例 言

- 1. 本書は化女沼治水ダム工事用道路建設に伴う宮沢遺跡・朽木橋横穴古墳群の発掘調査報告書である。
- 2. 調査の主体者は宮城県教育委員会である。
- 3. 発掘調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
- 4. 本書における土色は『新版標準土色帳』(小山・竹原:1973)を参照した。
- 5. 本書第1図は建設省国土地理院発行の1/25,000地図「荒谷」を複製したものである。
- 6. 遺物の整理および報告書の作成は文化財保護課が行ない、課員の協議を経て斎藤吉弘・後藤 彰信が担当・執筆した。

その際、多賀城跡調査破究所・進藤秋輝氏、吉沢幹夫氏、佐藤和彦氏から御教示をいた だいたことに感熱申し上げる。

7. 本遺跡に関する諸記録・出土遺物等は宮城県教育委員会が保管している。

# 調査要項

遺跡所在地:宮城県古川市宮沢・川熊・長岡

遺跡記号: AZ

調査対象面積:10,000m<sup>2</sup>

発掘面積: 4,200㎡

調 査 期 間 : 昭和59年4月23日~8月9日

調査協力機関:古川市教育委員会

調 査 担 当 : 宮城県教育庁文化財保護課

調 査 員: 平沢英二郎・藤沼邦彦・加藤道男・丹羽 茂・斎藤吉弘・阿部博志・手塚均

後藤彰信・小山田正男・小川 出・佐藤裕志・今野隆

# 目 次

	₹.
1	マー

Ι.	はじぬ	51z	 	 1
${\rm I\hspace{1em}I}.$	調査の	D方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	 	 4
Ш.	調査の	D成果·····	 	 8
1.	. 基本	層位	 	 8
2.	. 遺構	とその出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	 	 8
	A. 爹	皂地跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	 	 8
	В. =	上星跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	 	 • 11
	C. 清	觜 跡	 	 • 11
	D. 5	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	 	 • 17
	E. 排	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	 	 • 49
	F. 🕏	圣穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	 	 • 52
	G. ‡	‡戸跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	 	 • 53
	Н. =	上 壙	 	 • 53
	I. 道	遺構外の出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	 	 • 55
IV.	考察	Ş	 	 · 61
1.	. 出土	土器の年代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	 	 · 61
2.	. その	他の出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	 	 · 65
3.	. 遺構	の年代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	 	 • 67
4.	. 各段	階の遺構について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	 	 · 68
V.	まと	<u>-</u>	 	 . 70

# I. はじめに

宮沢遺跡は古川市宮沢・川熊・長岡に所在し、古川市役所の北方約6kmに位置する。

古川市の地形をみると北部は奥羽山脈東麓の東に張り出す清滝丘陵と呼ばれる丘陵地帯で、中央部から南部は江合川と鳴瀬川流域に形成された大崎低地である。宮沢遺跡は清滝丘陵の中で北原地区から川熊地区に向って南に派生する標高50m前後の緩やかな丘陵を中心にして、その周囲の沖積地を部分的に取りこんだ地形に立地している。この丘陵の西側と東側には南の大崎低地に続くやや幅のある開析谷が形成されている。遺跡の北側にはこの開析谷の低湿地を利用して造られた化女沼がある(宮城県:1981)。

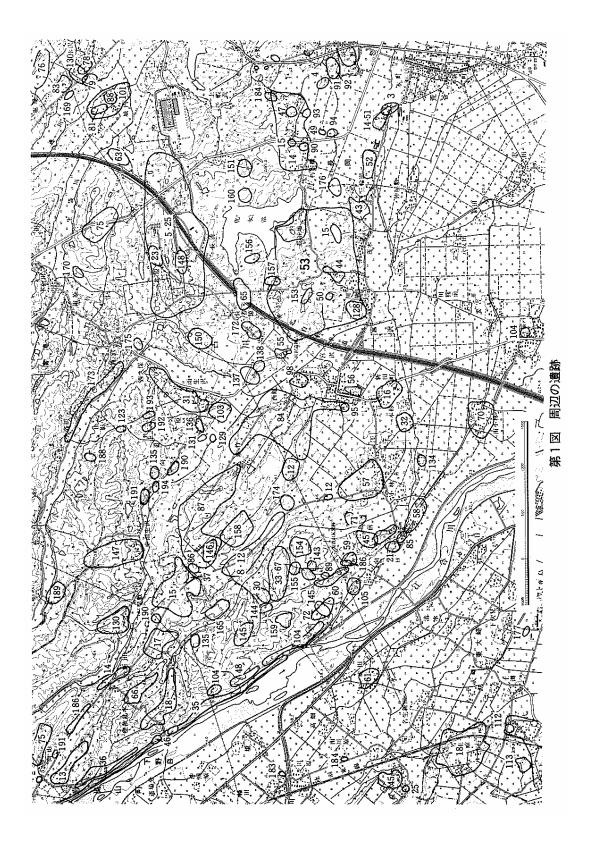
遺跡は東西約1,400m、南北約850mの範囲で宮沢、川熊、長岡の3地域を含む。遺跡内は主として標高50m前後の緩やかな丘陵地に立地しているが、各所に沢状の低地、湿地、沼などが入り込んで全体的に変化に富んだ地形をしている。遺跡の平面形はやや不整の長方形で周囲が土塁状の高まりによって区画されている。こういった高まりは途切れながらも、北、西、南辺の丘陵斜面に認められる。

宮沢遺跡は1974年~1976年に行った東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査と踏査(斎藤・高橋・真山:1980)で大規模な城柵・官衙跡と推定された。調査は主として西辺部分について行なわれ、築地、土塁、大溝、掘立柱建物跡、竪穴住居跡などが検出されている。

築地、土塁はともに外郭線を構成するものであり、愛宕山・長者原地区で2本の築地と1本の土塁が検出された。長者原地区では築地が沢に移行する部分で築地本体の延長線上に直線的に並ぶ杭列が発見された。また築地、土塁を跨いで櫓状の建物、外郭線の内側の丘陵斜面で掘立柱建物跡・竪穴住居跡が検出されている。出土遺物には土師器・須恵器・瓦・緑釉陶器・鉄斧・刀子・砥石などがあり、その年代から遺跡は奈良時代~平安時代まで続いたと考えられる。

なお遺跡の性格については城柵跡(覚繁城)、官衙跡(長岡郡衙跡)などが考えられているがまだ決定していない。遺跡の中で愛宕山地区が1976年に国の史跡に指定されている。遺跡内にはこの他に縄文時代・弥生時代・古代の散布地や、古墳時代の円墳・横穴古墳群・塚などが各所に認められる。このことから、各時期の遺跡をあまり壊さずにとり込んだ遺跡でもある。

本遺跡周辺には旧石器時代から中・近世にいたる各時期の遺跡が知られている。この中で、 奈良時代から平安時代の城柵跡・官衙跡・寺院跡と考えられるものとして、西方約5kmの台地 上に名生館と伏見廃寺、南西約9kmの台地上に城生遺跡、菜切谷廃寺、熊野堂遺跡がある。名生 館と城生遺跡からは掘立柱建物跡と竪穴住居跡などが検出されている。西南約12kmの台地上に は建物の基壇と掘立柱建物跡が検出された一ノ関遺跡がある。また宮沢遺跡の南辺築地外側の 三輪田遺跡からはロクロ挽き重弧文軒平瓦・偏行唐草文軒平瓦が出土している第1号溝と平安



第1表 遗跡地名表

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
3	新江川遺跡	68	十八引沢遺跡	134	灰 塚 遺 跡
4	いもり塚周辺遺跡	65	一本杉遺跡	135	間久田遺跡
5	長者原A遺跡	67	北馬場壇囲遺	136	若 林 遺 跡
8	塚原A遺跡	70	南小林遺跡	137	上 谷 遺 跡
9	塚原A遺跡	71	北の前遺跡	138	宇南遺跡
12	苦ノ谷地 遺跡	72	日 光 山 古 墳 群 (成田支群)	141	姥 沢 遺 跡
14	稲荷塚古古墳	75	畑谷地古墳群	143	浦 越 遺 跡
15	小野横穴古墳群 (姥沢群)	76	北山囲古墳群	145	成田A遺跡
16	新田町遺跡	78	梅女遺跡	146	一の沢遺跡
18	名 生 館 跡	79	堀 崎 遺 跡	147	雨生沢遺跡
20	小松杉の下窯跡	81	鴻の巣遺跡	148	長 清 遺 跡
21	抑の関遺跡	83	新 寺 館 跡	151	嵐 山 遺 跡
23	北原遺跡	84	西 館 遺 跡	153	山の上古墳群
25	長者原B遺跡	85	道場囲遺跡	154	浦 越 東 遺 跡
30	大谷地遺跡	86	一本松古墳	155	浦越北遺跡
31	野崎遺跡	87	一の沢古墳	156	長者原D遺跡
32	一本杉遺跡	88	城 内 窯 跡	157	長者原E遺跡
33	北馬場壇遺跡	89	小 寺 囲 遺 跡	158	塚原B遺跡
43	三輪田遺跡	90	小 野 横 穴 吉 墳 群 (朽木橋支群)	159	成田B遺跡
44	川熊遺跡	91	小 野 横 穴 古 墳 群 (羽黒支群)	160	上蝦沢遺跡
45	杉ノ下遺跡	92	小野横穴古墳群 (白山支群)	169	堀 場 遺 跡
46	国史跡大吉山瓦遺跡	93	小 野 横 穴 古 墳 群 (小高支群)	170	畑 谷 地 遺 跡
47	姥 沢 小 高 遺 跡	94	小 野 横 穴 古 墳 群 (岩崎支群)	172	新 庚 壇 遺 跡
49	岩 崎 古 墳	95	内 林 古 墳 群	173	蛇 沢 遺 跡
50	長 清 遺 跡 (長清古墳)	98	宮 沢 城 跡	174	塚原B遺跡
51	稲荷山遺跡	101	鴻ノ巣館跡	175	城 内 遺 跡
52	権現山遺跡	103	雨生沢城跡	176	朽 木 橋 遺 跡
53	国史跡・宮沢遺跡	104	石母田館跡	177	朝日遺跡
55	庚 壇 遺 跡	105	三 丁 目 城 跡 (氏家三州館、古館)	184	小 野 横 穴 古 墳 群 (新田支群)
56	下 田 遺 跡	112	小 館 跡	186	小 寺 遺 跡
57	新 谷 地 遺 跡	113	御所館跡	188	大谷川遺跡
58	抑の池囲遺跡	128	川熊館跡	189	倉の沢 B 遺跡
59	日光山古墳群 (荘厳寺支群)	129	西館A遺跡	190	間久田A遺跡
60	日 光 山 古 墳 群 (小寺囲支群)	130	市ヶ坂館跡	191	間久田B遺跡
61	宮田天神遺跡	131	若 林 A 遺 跡	194	若 林 B 遺 跡

時代の住居跡が検出されている。

窯跡には西方約3kmの丘陵上に大吉山瓦窯跡、東約6kmの丘陵上には木戸瓦窯跡、南西約13kmの丘陵上には日の出山瓦窯跡がある。集落跡は北方約3kmの丘陵上に藤屋敷遺跡がある。

# Ⅱ. 調査の方法と経過

# 1. 現状の地形

今回の調査個所は宮沢遺跡の北東部分にあたる。この北東部には遺跡内の最高所である「山の上」地区から北東に緩やかな丘陵がのびており、その北側と南側に小さな丘陵が枝状に張り出している。この丘陵はほぼ中央付近で東側の開析谷から入る幅の広い沢と南側低地から入る沢によって狭い尾根となっており、丘陵を西側丘陵と東側丘陵にわけている。この東側丘陵は先端で分岐してその間に小さな沢状の地形をつくっている。また、西側丘陵と東側丘陵間の北側から入る沢のほぼ中央が北東にわずかに張り出すため、沢は2つに分かれていき、この小さな張り出しの西側と東側は緩斜面となる。調査地区はこの西側丘陵の北東斜面から中央の沢の張り出し部を経て東側丘陵尾根を通る工事用道路敷である。

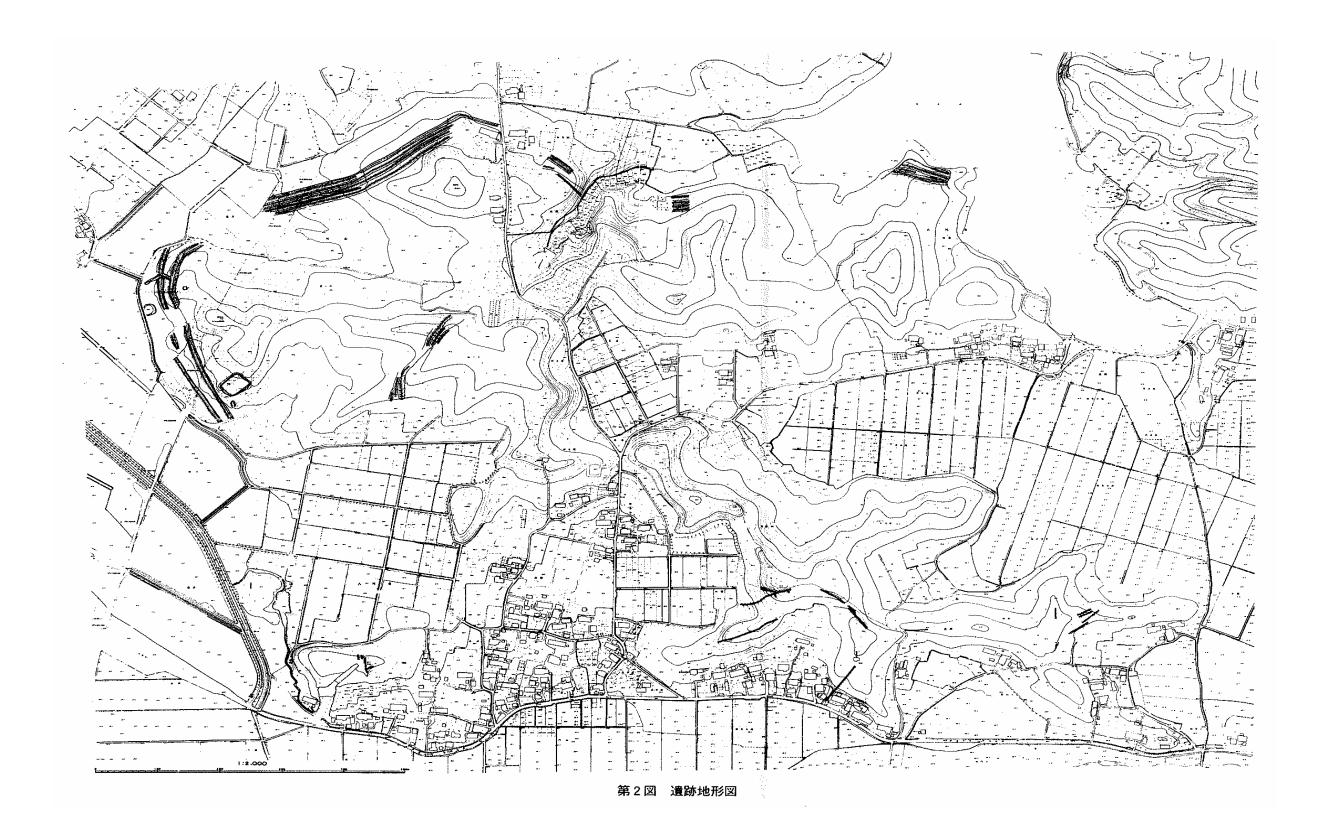
# 2.調査の方法

調査は化女沼ダム建設に伴なう工事用道路敷10,000㎡を対象として行なった。これまで西側丘陵北斜面の地表観察で遺跡北辺の築地・土塁が3条知られていた。このため北斜面の工事予定地内にも築地・土塁ののびが予想された。このことから、北側斜面(センター杭No.73~No.69の地域)の遺構が予想される地区は工事予定地全体を調査区とし、他の斜面(センター杭No.68~No.44の地域)は遺構の分布を確認するため12m~6m間隔で15m×3mのトレンチを設定した。また、北辺築地の延びを確認するために調査区北東斜面に任意に20m×3mのトレンチを3本(第1~第3トレンチ)設定した。なお、センター杭No.68~No.44地区では遺構を確認した時点でトレンチを拡張することにした。

実測は任意の点A・Bを設定し、この2点を結ぶ線(N-11°-W)とA点を原点として直交する線を基準として調査区にグリッドを組み、その交点を基準とした遣り方測量と平板測量を併用した。竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸・土壙は縮尺½で遣り方測量を行なった。築地・土塁・溝は縮尺½の遣り方測量と縮尺½の平板測量を併用した。

# 3.調査経過

調査は昭和59年4月23日から開始した。雑木の撤去と調査区の写真撮影の後に地区を設定し、 重機で表土除去を行なった。遺構確認の結果、西側丘陵の北東斜面(No.73~69)の第II層や第 III層で西側にみられる築地・土塁に連続する築地・土塁・溝が検出され、西側丘陵東斜面



から沢を経て東側丘陵東斜面の第III層でも住居跡・土壙・溝が検出された。このため西側丘 陵東斜面、東側丘陵南西斜面、東側丘陵東斜面を事前調査の対象地区に含めることにした。

5月~6月にはトレンチの拡張と併行して西側丘陵北斜面(第2区)の竪穴住居跡・井戸跡・ 土壙・溝の調査、7月~8月には東側丘陵の南西斜面(第3区)と東斜面(第4区)の竪穴住居 跡・土壙・溝の調査に入った。なお、北東斜面の第1~第3トレンチ内でも築地本体および築地 基底部が確認された。野外調査は8月9日に終了した。

調査した面積は約4,200㎡であり発見遺構は外郭を画する築地2条・土塁1条・築地と土塁に付属する溝6条・竪穴住居跡18軒・掘立柱建物跡5棟・井戸跡1基・土壙28基・溝14本・ピット群である。遺構から出土した遺物は土師器・須恵器・硯・瓦・砥石・鉄製品などであった。

なお整理にあたって調査時の遺構の名称を次のように変更した。

第5号溝→第8号溝、第13号住居跡→第13号土壙、第19号住居跡→第17号土壙、第7号住居跡 →第6号住居跡、第11・12号住居跡→第13号溝、第28号住居跡→第28号土壙。

# Ⅲ. 調査の成果

# 1. 基本層位

調査区内の堆積土は3枚認められた。

第 I 層は表土で厚さ10~15cmである。

第Ⅱ層は黒色の火山灰層である。場所によって厚さが異なり、東斜面と西斜面裾部の緩斜面には厚く堆積している。厚さは5~50cmである。第Ⅱ層上面から遺物が出土している。築地は第Ⅲ層の上面に構築している。なお、住居跡・土壙・井戸跡・ピット・溝などの遺構はⅢ層が分布している部分ではⅢ層上面で、Ⅲ層の分布していない部分では第Ⅲ層で確認している。

第Ⅲ層は褐色のシルト層である。

# 2.遺構とその出土遺物

調査区は宮沢遺跡の北東部で、東側の開析谷にのびていく2つの小丘陵の斜面である。遺構が分布する地域は西側丘陵の北東斜面(第1区)と東斜面(第2区)、東側丘陵の南西斜面(第3区)と東斜面(第4区)であった。

第1区の北斜面裾部には築地・土塁が構築されている。また、第2区〜第4区の斜面に竪穴住 居跡、斜面が緩やかになる部分に掘立柱建物跡・土壙などが分布する。(第4図)

# A. 築地跡 (第5図)

築地は2条検出された。いずれも遺跡の北辺を並行しながらほぼ東西方向(N-79°-E)にのびる。このうち南側の築地を「第1築地」、北側の築地を「第2築地」と呼ぶ。

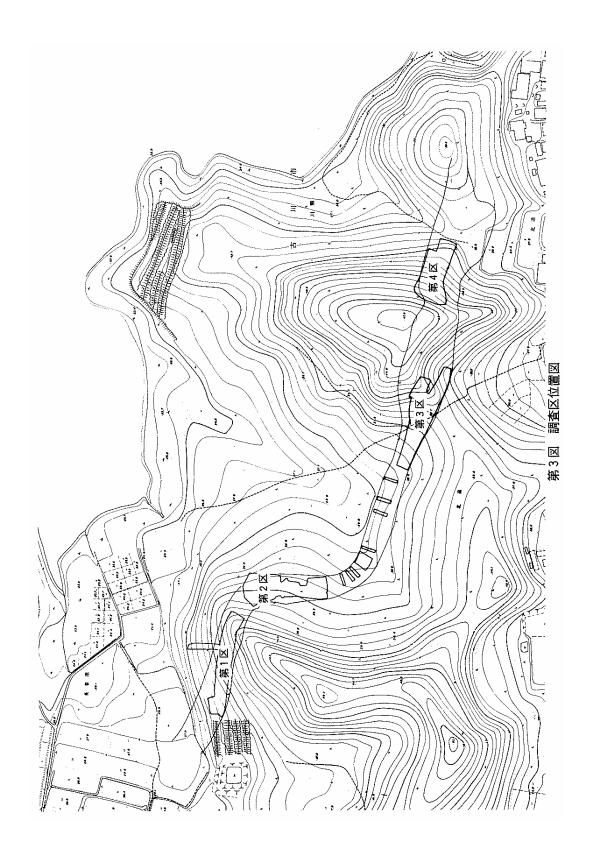
#### 第1築地

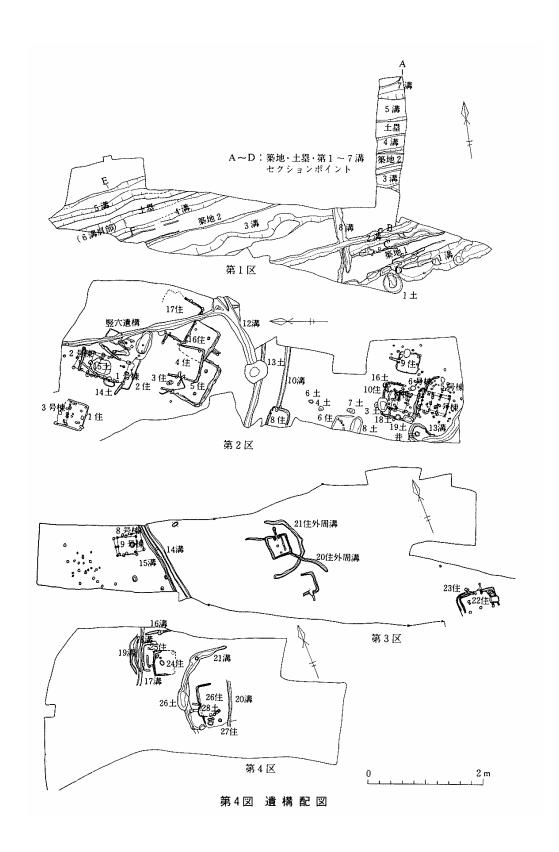
第1築地は地表観察で北斜面に高まりとしてみられ、工事用道路敷まで延びてきている。

調査した長さは約22mである。そのほぼ中央で残存する築地の版築が約10mの範囲で認められた。版築の東側は築地基底部の削り出しが残っていたが、西側は削平のために不明であった。

版築部分は本体の積み手の違いが識別され、その単位は約3~4mである。規模は基底幅が約2.5m、本体の高さが残りの良い部分で10cmである。版築は黄褐色シルト、黒褐色シルトを2~3cmの厚さで交互に積み重ねており、第II層を5~10cm削り出して、その上面に直接行なっている。

寄柱穴と考えられる柱穴列が本体の両側に対になって検出されている。柱穴は掘り方が径30cmの円形で、一部に柱痕跡が確認されたものもある。柱間隔は1.5~2.5mである。





築地の南側に第1溝、北側に第2溝が並行している。

北東斜面に設定した第2・第3トレンチでも築地積み土の痕跡が認められ、第1築地が東側に も延びることが判明した。

#### 第2築地

第2築地は斜面が緩傾斜となる部分でみられ、その高まりは部分的に削平をうけているが、 北東斜面まで認められる。道路敷で調査した長さは約22mである。築地本体の積み土は削平されていたが、西側で築地基底部の削り出しが約10mの長さで確認できた。

規模は基底幅約2m、基底部削り出しの残存部は約5cmである。基底部の両側から対になって 寄柱穴と考えられる柱穴列が検出されている。柱穴は掘り方が径約20cmの円形であり、中には 柱痕跡が確認されるものもある。柱間隔は1.8~2.5mである。築地の南側には第3溝、北側には 第4溝が築地に並行している。

また、第1トレンチでは築地本体が確認できた。規模は基底幅が約2.7m、本体の高さが残りのよい部分で15cmである。築地本体は版築によるもので黄褐色土を2~10cmの厚さで交互に積み重ねている。版築は第III層上面に直接行なっている。積み手の違いは区別できなかった。

# **B. 土塁跡** (第5図)

北斜面の第2築地の北側に7m離れて土塁がある。

調査した長さは22mである。

規模は基底幅が3.5~4m、残存高は残りのよい部分で約50cmである。積み土は明褐色土のブロック混りの褐色土を斜めに3枚積み上げた上に明橙色ブロックを外側に厚く積んでいる。なお、土塁の北側には第5溝が並行している。

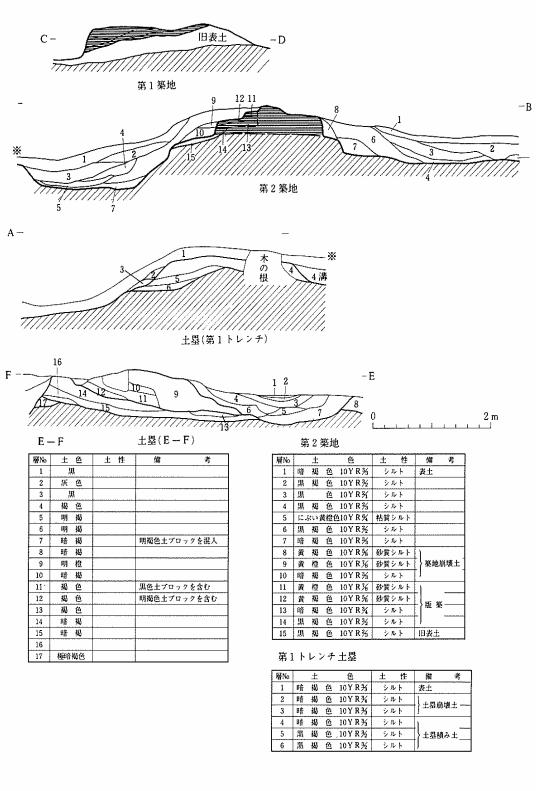
また、第1トレンチで確認した土塁の構築面は外側が第Ⅲ層上面で内側が第Ⅲ層である。積み土は暗褐色土で、内側の構築面は第4溝の堆積土面に及んでいる。

# C. **造** 跡(第6図)

溝は北東斜面で築地や土塁とほぼ接して並行するものが7条(第1~7号溝)検出された。それ以外の溝は18条(第8~28号溝)である。

#### 第1号溝

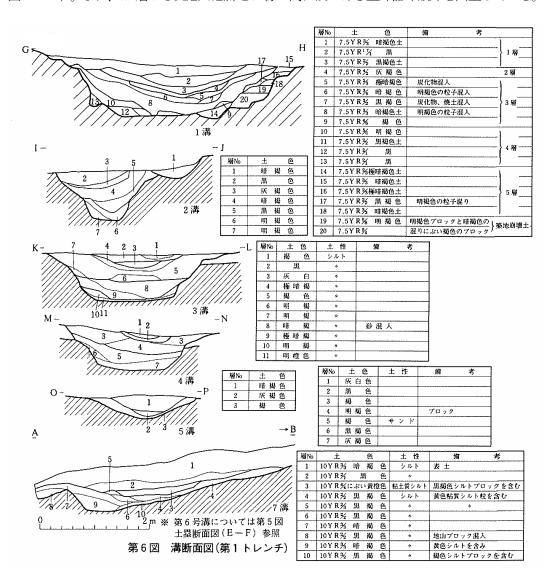
第1築地の内側にある。確認面は北側(築地側)の東半が第Ⅱ層で、他の部分は第Ⅲ層である。西側で堆積土が第1号土壙に切られている。確認した長さは21mである。規模は上端幅が

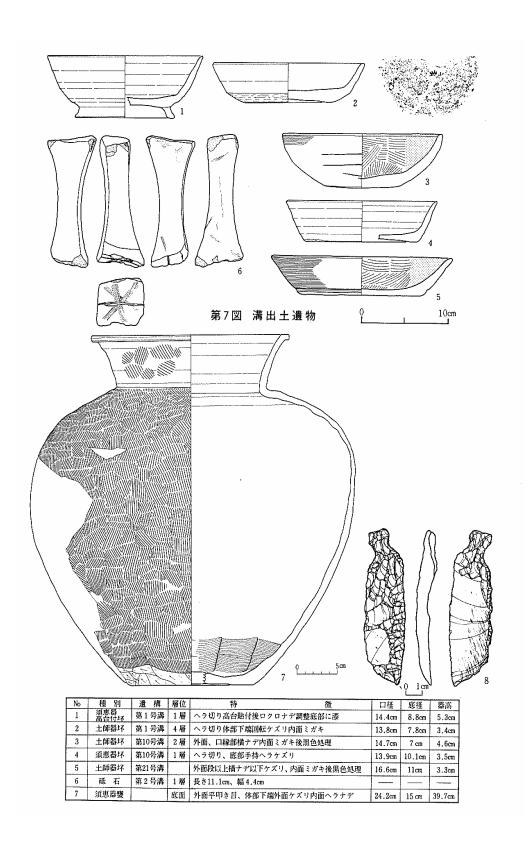


第5図 築地・土塁断面図

3.5~4m・下端幅が1.5~2m、深さは0.4~0.7mである。西側が浅く東側にいくにしたがって深くなる。断面形は逆台形である。壁や底面の状況は全体に凹凸がはげしく、底面では土壌状に窪んだ部分も見られる。堆積土は大別して16枚認められ、黒褐色シルト・暗褐色シルトなどが交互に堆積している。第3層に灰褐色の火山灰層がある。溝の肩から底面に堆積した第6層は土性・土色などから築地の崩壊土と考えられる。

遺物は底面と堆積土から少量出土している。図示した遺物は底面出土の須恵器甕、No.5層出土のロクロ使用で体部下端にケズリがある土師器坏、No.1層出土の須恵器高台付坏である(第7図1・2・7)。なお、No.1層から丸底で底部と口縁の間に段のある土師器坏破片も出土している。





## 第2号溝

第1築地の北側にある。確認面は南側(築地側)の東半が第Ⅱ層で、他の部分は第Ⅲ層である。東側が南北方向に走る第8号溝で切られている。

調査した長さは 24mである。規模は上端幅が 1.5~2m、下端幅が 0.5~0.8m、深さが 0.3~0.5mである。断面形は逆台形である。堆積土は大別して 4 枚認められ、主に黒色シルト・暗褐色シルトなどである。第 2 層に灰褐色シルトの火山灰層がある。

遺物は砥石が出土している。

#### 第3号溝

第2築地の南側にある。確認面は北側(築地側)が第Ⅱ層で、南側は第Ⅲ層である。

調査した長さは23mである。規模は上端幅が2~4m、下端幅が1.5~3m、深さは0.4~0.6m である。断面形は逆台形である。南壁は出入りがあり幅は一定しない。堆積土は大別して5枚認められ、主に黒色シルト・暗褐色シルト・明褐色シルトである。第2層に灰褐色の火山灰が堆積している。

遺物は堆積土より少量出土している。

#### 第4号溝

第2築地の北側にあり、確認面は南側(築地側)が第II層、北側は第6号溝堆積土上面であり、 北側は6号溝の堆積土の一部を切って構築している。調査した長さは21mである。規模は上端幅 が3m、下端幅が1.5~2m、深さは約0.6mである。断面形は逆台形である。堆積土は大別して5 枚認められ、主に黒褐色シルト・暗褐色シルトである。第1層に灰白色シルトの火山灰層がある。 遺物の出土はない。

#### 第5号溝

土塁の北側にある。確認面は南側(土塁側)が土塁の積み土上面、北側は第Ⅱ層である。 調査した長さは18mである。規模は上端幅が3~4m、下端幅が1~2m、深さが0.4mである。 断面形は「U」状である。堆積土は4枚認められ、主に暗褐色シルト・褐色シルトである。第2 層に灰褐色シルトの火山灰が堆積している。

遺物は出土していない。

#### 第6号溝

第4号溝の北側の土塁積み土下にある。確認面は南側が第Ⅲ層で、北側は第Ⅱ層である。確認

した長さは16mである。規模は第2築地外側の4号溝に切られているため不明である。確認した下端幅は3m、深さ0.6mで、他の溝にくらべて幅が広い。堆積土は2枚認められ、主に暗褐色シルト・黒褐色シルトである。

遺物は出土していない。

#### 第7号溝

第1トレンチ北端の第5号溝の北側にある。確認面は第Ⅲ層である。規模は上端幅が2~2.5m、下端幅が0.5m、深さ0.4mである。断面形は逆台形である。堆積土は大別して4枚認められ、主として暗褐色シルト・黒褐色シルトである。道路敷西側の第5号溝北側にある落ち込みに連続していくものと思われる。

#### その他の構

築地・土塁に並行する溝以外の溝は18条 (第8~28号溝) である。これらの溝の走行および 出土遺物について概述してみると次のようである。

第8号溝は丘陵北斜面にあり、第1築地・第1~3号溝の堆積土を切って斜面を縦に走っている。 幅は斜面裾にいくに従って広くなっている。

第9~13号・第23~28号溝は2区斜面にある。この中で第9号溝・第23~27号溝は北側緩斜面にあり、規模は長さ5~8m、幅20~30cm、深さ20cmである。特に走行に規則性はみられなく、遺物の出土はない。第10号溝は頂部から東側斜面にのびていく溝である。西側は第8号住居跡に切られており、断面は逆台形をしている。規模は上幅が1~2m、深さ50cmである。堆積土、底面から土師器甕・須恵器甕の破片が多く出土している。

第12号溝は頂部を10号溝と並行して東に走り、斜面途中から北に折れて北斜面を第17号住居跡を切りながら下っていく。断面形は逆台形状をしており、壁は斜めに立ち上る。調査した長さは50m、上幅1~2m、深さ50cmであり、堆積土中から土師器・須恵器片が多く出土している。第13号溝は頂部から南西斜面を1号井戸を切って沢にぬける。堆積土は黒褐色土シルトでその上面から土師器・須恵器片が多く出土している。

第14~15号溝は第3区の斜面の裾部を並行して東西に走るが、遺物の出土はみられない。 第17~22号溝は第4区の東斜面にあり、第17号溝は第24号住居を切って住居に並行して走る。 第18・19号溝は第24・25号住居跡の西側を弧を描いて2本並走している。これらの溝の遺物の出 土量は少ない。

第21号溝は第26・27号住居跡の北側を北に弧をえがくようにめぐっている。第28号土壙・第 26号土壙に切られており、第27号住居跡より古い溝である。堆積土中から土師器・須恵器が出土 している。第22号溝は第27号住居跡の南側を切って住居に並行している。

# D. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は2区で12軒、3区で4軒、4区で4軒の計20軒検出されている。

#### 第1号住居跡

【重複・平面形・規模】 第2号掘立柱建物( $P_{13} \sim P_{17}$ )と重複している。掘立柱の柱穴は床面で確認されたが新旧関係は不明である。北壁は削平されているが、残存する壁・周溝から住居平面形は方形と推定される。規模は東西長が4.7mであり、北壁の残存長は4.5mである。西壁は $N-10^{\circ}$  -Eの方向である。

**【壁】** 地山を壁としている。下部は周溝の部分が壁の外側に掘り込んで斜めであるが、その上部はほぼ垂直に立ち上る。残存する壁高は45~70cmである。

【床面】 床面はほぼ平担で、床面上に黒色土がみられ生活層と推定される。東壁沿いには幅約1mで貼床がみられ、他は住居掘り方(地山)を床としている。貼床の下には深さ約10cmの掘り方がみられる。

**【柱穴】** 床面から10個のピットが検出された。 $P_1 \sim P_4$ は対角に配置されること、それぞれを結ぶと長方形になることなどから主柱穴と推定された。

【周溝】 周溝は残存する壁沿いにある。断面は「√」状で、壁の外側に掘りこんでいる。 上幅約20cm、床面からの深さは約10cmである。

【その他の施設】 壁からやや離れて西壁と南壁に沿って「L」状の溝がみられ、断面「U」 状である。溝の総長は約4.2m、上幅約10cm、深さ約3cmである。

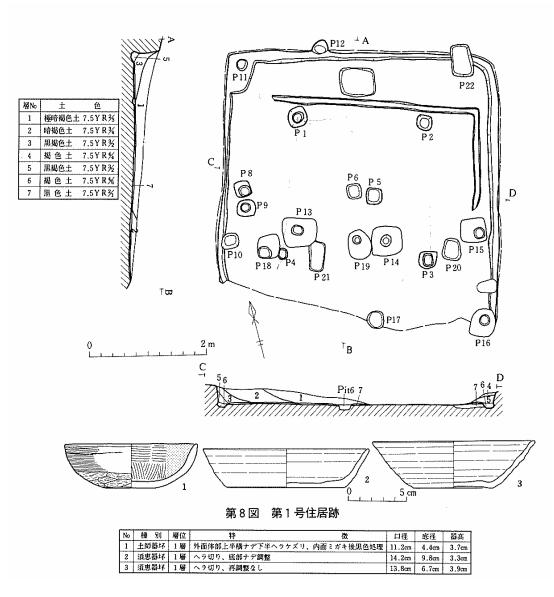
【**堆積土**】 住居内堆積土は4枚に大別され、将棋倒し状の堆積状況を示している。第1層は極暗褐色シルトで住居中央部の床面に、第2層は暗褐色シルトで住居の南東に、第3層は黒褐色シルトで住居南西に分布している。第4層は住居床面の生活層である。

【出土遺物】 遺物は床面・ $N_0.1\sim3$ 層から出土しているが出土状況にまとまりはない。図示した遺物は $N_0.1$ 層出土の土師器坏1点、須恵器坏2点である(第8図 $1\cdot 2\cdot 3$ )。

#### 第2号住居跡

【**重複・平面形・規模**】 14号土壙・17号土壙を切っている。住居北側は削平されているが 残存壁から住居平面形は方形と推定される。規模は東西長が5.7mであり、東壁の残存長は2.7 mである。西壁の方向はN-15°-Eである。

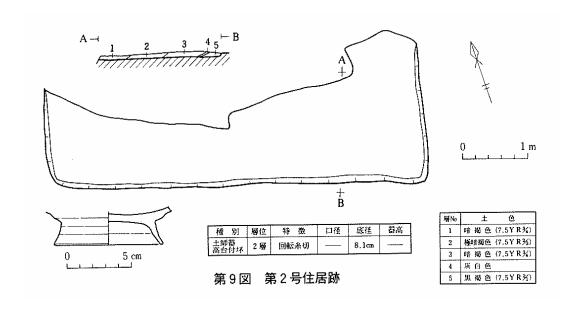
【壁・床】 壁は西側と南側が地山で、東側が17号土壙の堆積土である。壁の立ち上がりはゆ



るやかであり、残存する壁高は5~10 cmである。床面はほぼ平坦であり、床は東側が第17号土壙の堆積土で他の部分は住居掘り方(地山)と一致している。カマド・柱穴・周溝等の施設は認められなかった。

【**堆積土**】 堆積土は3枚に大別でき、将棋倒し状の堆積状況を示す。第1層は暗褐色シルトで住居中央の床面に、第2層は灰白色で3層上面にうすく、第3層は黒褐色シルトで壁沿いに分布している。

【出土遺物】 遺物は堆積土から土師器、須恵器の破片が出土しているが、量は少ない。 図示した遺物はNo2層出土の土師器高台付坏底部片である(第9図)。



## 第3号住居跡

【**重複・平面形・規模**】 第4・5号住居跡の堆積土を切っている。住居東側は削平されているが、残存壁から住居平面形は方形と推定される。規模は南北長が約4.3mであり、南壁の残存長は2.6mである。西壁の方向はN-13°-Wである。

【壁・床】 壁は西壁北側が地山で、他の部分は5号住居跡の堆積土である。壁の立ち上がりは急で、残存する壁高は5~7 cmである。床はほぼ平担でやや北に傾斜している。北側は第4・5号住居跡の堆積土を床としており、他は住居掘り方(地山)と一致している。カマド、柱穴、周溝等の施設は認められなかった。

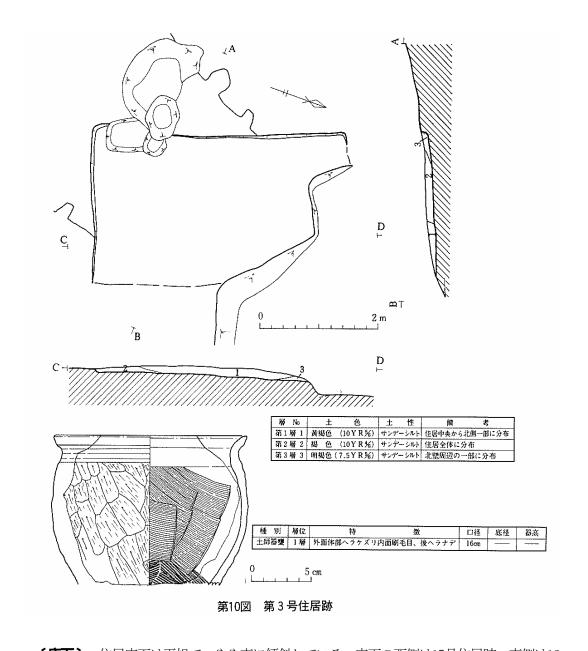
【堆積土】 堆積土は褐色砂質シルトである。

【出土遺物】 遺物は床面、堆積土から出土している。図示した遺物はNo.1層の土師器甕1点である(第10図)。

#### 第4号 - A住居跡

【重複・平面形・規模】 第3・5・16号住居跡と重複している。第3号住居跡に切られ、第5・16号住跡を切っている。4号住居跡床面下で4号B住居跡の周溝が確認された。周溝の平面形は4号住と相似形であることから、4号A住居は改築によって拡張(4住B→4住A)したものと推定される。北壁は削平されているが、残存する壁・周溝から住居平面形は方形と推定される。西壁の方向は $N-14^\circ$  — Eである。

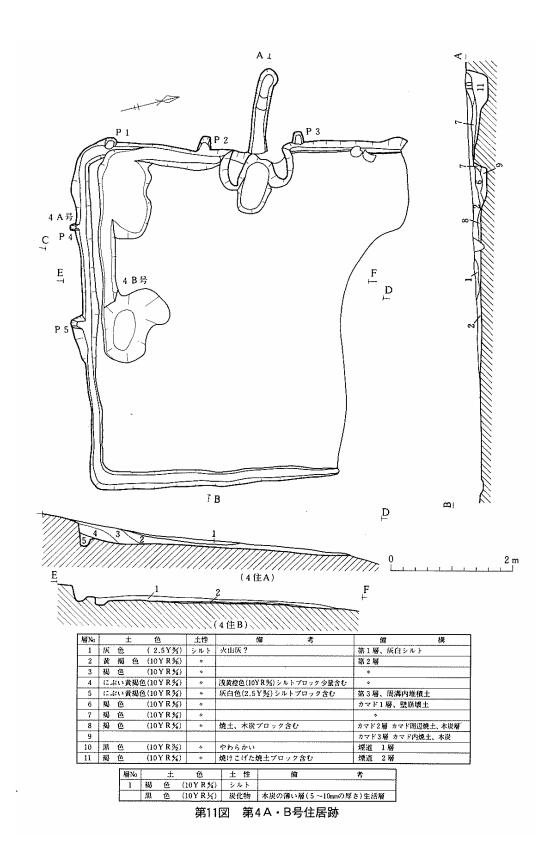
**【壁】** 5号住居跡・16号住居跡の堆積土を壁としている。立ち上がりは急である。残存する壁高は25~30cmである。

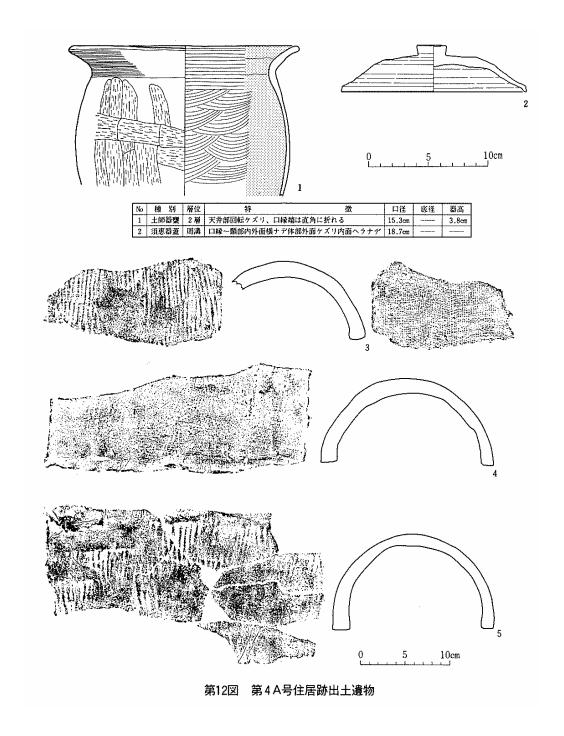


【**床面**】 住居床面は平担で、やや東に傾斜している。床面の西側は15号住居跡、東側は16号住居跡の堆積土を床としている。

【**周溝**】 カマド付設部分をのぞいて壁沿いにみられる。断面形は「U」状をしている。上幅約10~20cm、床面からの深さは約10cmである。

【カマド】 住居西辺の中央付近に付設されている。カマドの方向はN-70°-Wである。 残存する燃焼部側壁は奥壁側の地山を削り出し、大部分は粘土を積み上げてつくられている。 規模は奥行1m、幅40cmである。燃焼部底面は床面から約10cmくぼみ、皿状をしている。側壁内 側は火熱を受けて赤変している。煙道部との境にはわずかな段がみられる。煙道は先端に向





って斜めに掘りぬかれ、先端にピットが掘られている。煙道部は長さ1.4m、幅約25cm、深さ約20cm、ピットの大きさは径30cmである。

【**桂穴**】 西壁に3個( $P_1 \sim P_3$ )、南壁に2個( $P_4 \sim P_5$ )のピットがあり、なお西壁の $P_2$ ・  $P_3$ はカマドの左右に対になってみられる。平面形は長方形で、大きさは10~20cm、深さが30~40

cmである。配置が1.5mの等間隔であることから壁柱穴と思われる。

【**堆積土**】 堆積土は2枚に大別され、第1層は灰白色シルトで堆積土上部中央に、第2層は 褐色シルトで住居床面に分布する。

【出土遺物】 遺物はカマド・床・周溝から出土している。図示した遺物は、カマド、周溝出土の土師器甕・丸瓦、堆積土第2層出土の須恵器坏蓋である(第12図1、2、3、4、5)

#### 第4号 - B住居跡

【**重複・平面形・規模**】 4号住居の拡張以前の遺構で西壁と南壁の一部が残っている。残存する壁・周溝の状況から平面形は隅丸方形と推定される。残存する壁の長さは西壁が5m、南壁は3.3mである。西壁の方向はN-19°-Eである。

【壁・床】 地山を壁としている。西壁は4号-A住居跡とほぼ同じであり、壁高は5~10cm である。床面は平担で厚さ2~4cmの褐色土の貼床がある。

【周溝】 北壁と西壁沿いにあり、断面形は箱形である。周溝の上幅は20~25cm、床面からの深さは1.5cmである。

【**堆積土**】 堆積土は褐色シルトで住居全体にみられ、拡張時の埋土と思われる。堆積土の上面が第4-A住の床面となっている。

【遺物の出土状況】 遺物は周溝・掘り方埋土・堆積土から少量出土している。なお、堆積 土からロクロ不使用の土師器丸底坏の破片などが出土している。

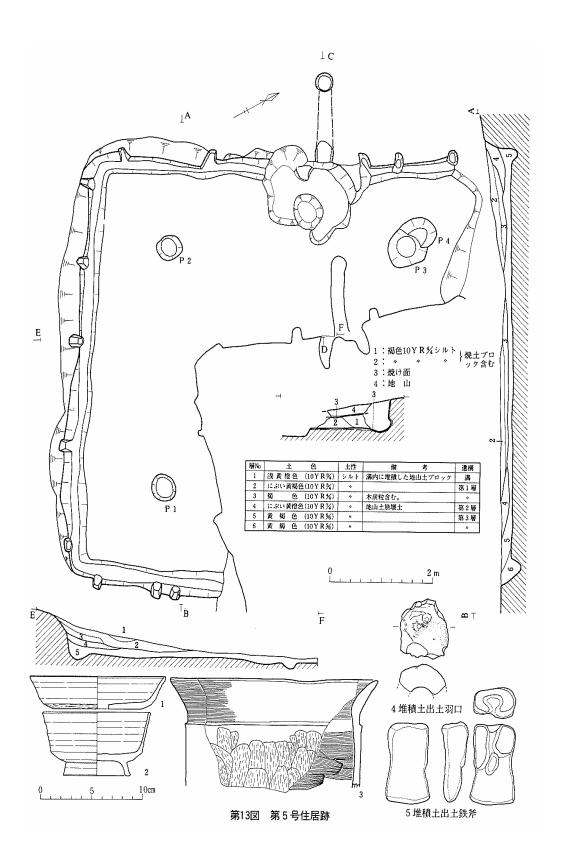
#### 第5号住居跡

【重複・平面形・規模】 第3・4・16号住居跡に切られている。残存する壁と周溝から平面 形は方形と推定される。規模は東西軸長7.6mで北壁の残存長は7mである。西壁の方向はN -24°-Eである。

**【壁】** 地山を壁としている。残存している壁高は70cmである。ほぼ垂直に立ち上がる。

【床面】 床面は平担である。床は住居掘り方(地山)と一致する。

【柱穴】 床面から4個のピット( $P_1 \sim P_4$ )、壁を掘り込んで13個の方形のピットが検出されている。この中で $P_1 \sim P_3$ は平面形が楕円形で、大きさは40~50cmである。この13個のピットは住居壁に平行すること、規模がほぼ同じであることから主柱穴と考えられる。そのほかは平面形が長方形で大きさが15cm×10cm、深さは50~60cmである。側壁に3~4m間隔で規則的に並ぶ。平面の形状・深さなどから壁柱穴と考えられる。



No	種別	53	(†	<b>持</b> 微	口径	庭径	器高
180	121 775	ner .	177		10.0		
1	須惠器坏	3	N/A	<b>底部へう切り体部ト端回転ケスリ</b>	13.2cm	8.6cm	2.9cm
2	須惠聯 高台付坏	3	層	底部ロクロナデ調整体部下端回転ケズリ	10.3cm	6.4cm	57cm
3	土師器變	カマ	, L.	□緑部内外面横ナデ、体部外面ケズリ内面へラナデ	20,0cm		

【周溝】カマド付設部分をのぞいて壁沿いにみられる。断面は「U」状をしている。幅約30~40cm、床面からの深さは15~20cmである。

【カマド】 北壁の中央付近に付設されている。カマドの方向はN-67° -Wである。残存する燃焼部側壁は褐色土を積み上げてつくられている。燃焼部側壁内側は火熱を受けて赤変している。規模は奥行1.2m、幅約60cmである。底面は皿状をしている。煙道部は天井部が残っている。地山をほぼ水平に掘り抜いてつくられており、先端部はややくぼんでいる。規模は長さ1.1m、幅30cmである。

【**堆積土**】 堆積土は3枚に大別でき、第1層は褐色シルトで住居中央部に、第2層はにぶい 黄褐色シルトで壁沿いに、第3層は褐色シルトで床面全体に分布している。

【出土遺物】 カマド・周溝・ピット・No.1~No.3層から出土しているがとくにまとまりはみられない。図示した遺物はカマド出土の土師器甕、No.3層出土の須恵器坏と高台付坏と堆積土出土の羽口・鉄斧である(第13図-1・2・3・4・5)。

## 第6号住居跡

【**重複・平面形・規模**】 第8号土壙に切られている。西側が調査区外にのびていく。南東が削平されているが、残存する壁から平面形は隅丸方形と推定される。規模は南北軸約6.6m、北壁残存長は約2.2mである。東壁の方向はN-2°-Eである。

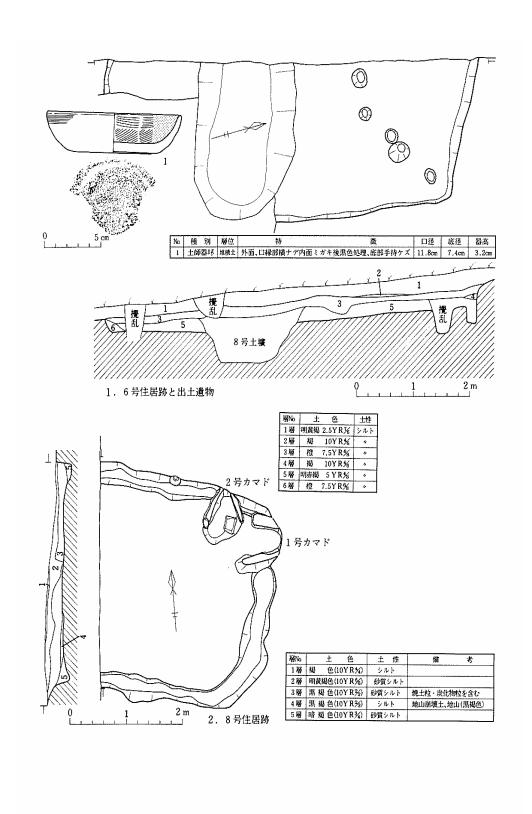
【壁・床面・堆積土】 地山と第Ⅲ層を壁としている。壁の立ち上りはゆるやかで、残存する壁高は10cmである。床面は平坦で、やや南に傾斜する。床は住居掘り方(地山・第Ⅲ層)と一致する。床面北側で5個のピットが検出されている。堆積土は1層で黒褐色シルトが住居全体に堆積している。

**【出土遺物】** 遺物は堆積土から出土している。図示した遺物は土師器坏である(第14図1)。

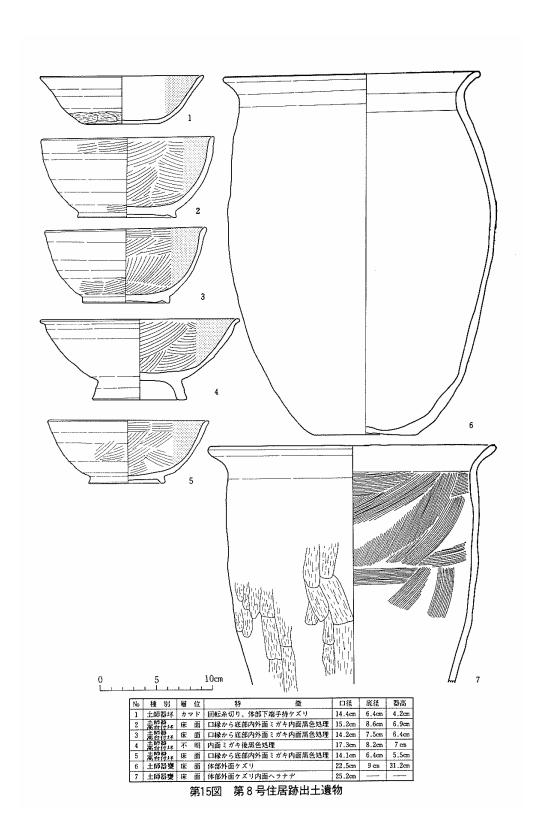
#### 第8号住居跡

【**重複・平面形・規模**】 10号溝を切っている。西側は調査区外にのびる。残存する壁・周溝から平面形は隅丸長方形と推定される。規模は東西軸長は3.5m、北壁残存長は3mである。東壁の方向はN-16°-Eである。

【**壁**】 地山を壁としている。残存する壁高は床面から約30cmであり、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。



第14図 第6号・第8号住居跡



【床面】 床面は平坦で硬い。掘り方(地山)と一致している。

【**周溝**】 北東隅のカマドの部分をのぞいて壁沿いにみられる。断面形は「U」状で、幅20~35cm、床面からの深さは約5~20cmである。

【カマド】 住居北東隅に2基付設されている。2基ともに煙道部は確認できなかった。8住1号カマドは東壁北隅にある。カマドの方向は $E-10^\circ-S$ である。燃焼部奥壁は壁外に約20cm掘り込んでおり、その内側に燃焼部側壁を構築している。燃焼部側壁は褐色土を積み上げてつくられている。規模は奥行70cm、幅50cmである。燃焼部底面は床面から約5cm低く、皿状をしている。側壁内側は火熱を受けて赤変している。8住2号カマドは西壁東隅に構築されている。カマドの方向は $N-27^\circ-E$ である。燃焼部側壁の焚き口部分は礫を芯として褐色上を積み上げてつくられている。規模は奥行70cm、幅40cmである。底面はやや皿状にくぼんでいる。

【**堆積土**】 堆積土は明褐色シルトで堆積する場所によって部分的なちがいはあるが基本的には1層である。

【出土遺物】 遺物は床面・周溝・カマド・堆積土から出土している。図示した遺物はカマド周辺の床から出土の土師器坏と甕である(第15図1~7)。

# 第9号住居跡

**【平面形・規模】** ほぼ正方形で、長軸3.8m、短軸3.6mで南北にわずかに長い。長軸方向はN-10°-Eである。

【**壁**】 地山を壁としており、床面から斜めに立ち上がる。壁高は30~10cmである。

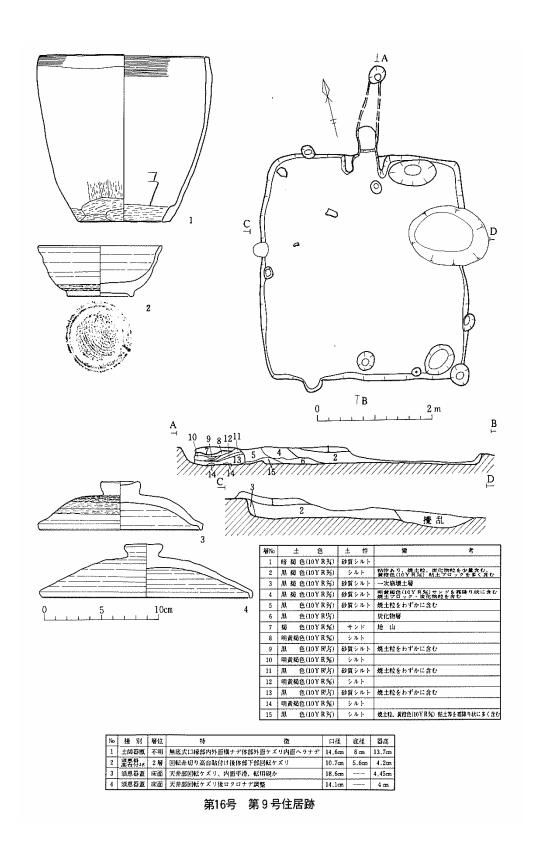
**【床面】** 床面は平坦で硬い。住居掘り方(地山)と一致している。周溝は認められない。 壁沿いに4個のピット、床面に3個のピットがあるが大きさ、並び方に規則性がなく柱穴は不明である。

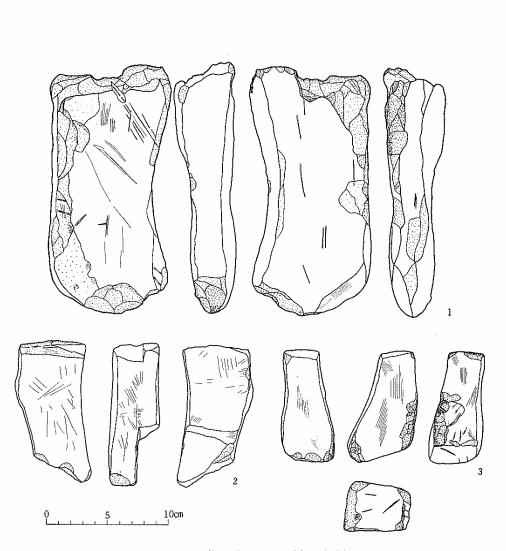
【カマド】 北壁の中央付近に付設されている。カマドの方向はN-16°-Eである。残存する燃焼部側壁は明黄褐色粘土を積み上げてつくられている。煙道部は地山をほぼ水平に掘り抜いてつくられている。煙道の長さ1.5m、幅40cmである。

【**貯蔵穴状遺構**】 カマドの右側に楕円形のピットが位置する。長軸80cm、短軸40cm、深さ15cmで皿状に凹んでいる。

【**堆積土**】 堆積土は2枚に大別できる。第1層は暗褐色シルトで堆積土上部の住居跡全体に、 第2層は黒褐色シルトで床面全体に分布している。

【出土遺物】 遺物は床面、カマド、煙道、ピット、堆積土から出土している。堆積土からの出土が多い。図示した遺物は床面の須恵器蓋、堆積土No.1層の土師器甑、須恵器高台付坏、転用硯の可能性のある須恵器蓋(第16図-1・2・3・4)と砥石(第17図)である。





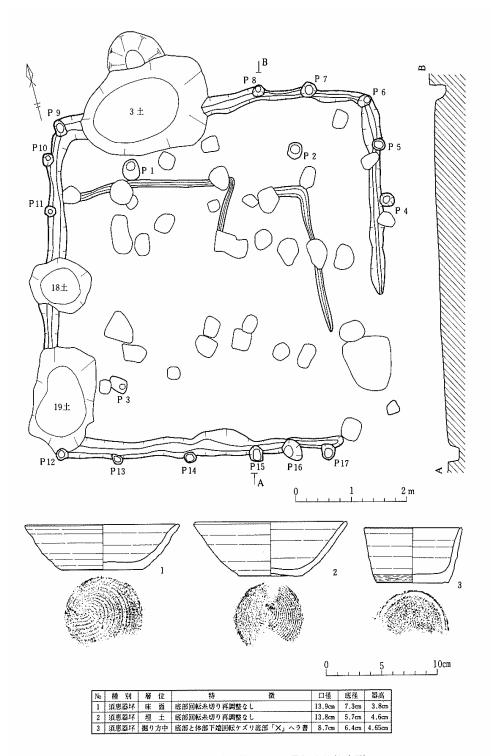
第17図 第9号住居跡出土砥石(床面出土)

## 第10号住居跡

【重複・平面形・規模】 第3・18・19・16号土壙、第4・5号掘立柱建物跡と重複している。 第3・18・19号土壙に切られて第16号土壙を切っている。掘立柱建物跡は床面で確認されたが新 旧関係は不明であった。周溝の状態から平面形は正方形で東西軸長6m×南北軸長6mである。 東壁方向がN-14°-Eである。

【壁・堆積土】 壁・堆積土は一部残っている。

**〔床面〕** 床面は平坦であり硬い。床は南側に一部貼り床がみられるが、大部分は住居掘り方(地山) と一致する。床面の北側と東側に「つ」状の溝がみられる。断面は逆台形で、幅約



第18図 第10号住居跡・第5・6・7号掘立柱柱穴群

20 cm、深さ10 cmである。

【柱穴】 住居に伴うピットは床面で3個と周溝周囲の14個( $P_4 \sim P_{17}$ )である。 $P_1 \sim P_3$ は 円形で大きさが径30cm、深さ20cmである。東辺と北辺に平行して位置していること、大きさが 類似していることなどから主柱穴と推定される。 $P_4 \sim P_{17}$ は平面形が円形で、大きさが径約10  $\sim$ 20cmである。 $P_4 \sim P_{17}$ は約1.5 $\sim$ 1.8m間隔で並んでいることや、大きさが径20cmで類似し他 のピット群と組合わないことで壁柱穴と推定される。

【**周溝**】 南東隅の削平された部分をのぞいてめぐっている。断面は逆台形で、幅約20cm、深さ10cmである。

【出土遺物】 遺物は床面・堆積土・掘り方から出土している。図示した遺物は床面出土の 須恵器坏(第18図1・2)と掘り方出土の須恵器坏である。なお床面からロクロ使用の土師器甕 の破片が出土している。

#### 第16号住居跡

【**重複・平面形・規模**】 4号住・5号住・17号住居と重複している。第5号住居跡を切っており、第4・17号住居跡から切られている。南側は削平されており、残存する壁・周溝・柱穴の状況からは方形と推定できる。規模は東西軸長が6.2m、残存する東壁の長さは3.3mである。西壁の方向はN-29°-Eである。

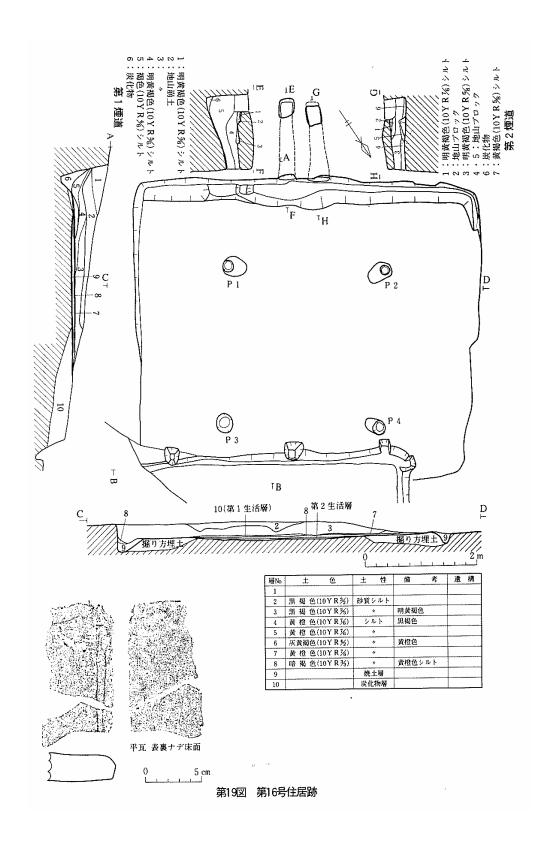
**【壁】** 地山を壁としている。ほぼ垂直に立ち上る。

【床面】 床面は新旧2枚の生活面が認められている。古い床面は周囲の住居掘り方埋土上面と中央部の掘り方底面(地山)の上面であり、黒色土の薄い生活面がみられる。新しい床面は古い床面の中央部分に黄橙色の埋土を行なっており、周囲は古い床面をそのまま使用している。床面は6m×4mの範囲で認められる。

【桂穴】 床面に4個のピット( $P_1 \sim P_4$ )がみられる。平面形は円形で、規模は径40cmで深さ40~50cmである。ピットが対角線上に位置し、それぞれ結ぶと長方形になること、規模・深さなどから主柱穴であると考えられる。

【**周溝**】 南壁の壁沿いにみられる。断面「U」状で上幅は約30cmで、床面からの深さは約15cmである。

【カマド】 南壁中央付近に煙道が2本(第1煙道・第2煙道)みられた。煙道は地山掘り抜きで天井が遺存していたが燃焼部は確認できなかった。第1煙道は先端に向ってななめ下りに掘られており長さ1.2m、幅25cmである。煙道の方向は $S-30^\circ$  -Wである。第2煙道はやや斜め上にのびており、長さ1.1m、幅30cmである。煙道の方向は $S-27^\circ$  -Wである。煙り出しはいずれも長方形である。



【**堆積土**】 堆積土は2枚に大別される。第1層は黒色シルトで住居跡南半に、第2層は黄褐色シルトで住居全体に分布しており、いずれも水平堆積である。人為的に埋めている可能性がある。

【出土遺物】 遺物は床面・周溝・第2煙道・堆積土から出土しているがまとまりはない。 堆積土中からロクロ不使用の土師器甕の破片が出土している。図示した遺物は床面出土の平瓦 である(第19図)。

## 第17号住居跡

【重複・平面形・規模】 16号住居・12号溝と重複している。16号住を切っており、12号溝から切られている。北側半分は削平で壁は不明である。平面形は残存する壁・周溝から方形と推定される。規模は東西軸長が7m、残存する西壁が3.9mである。西壁の方向はN-27°-Eである。

**【壁】** 壁は西壁が第16住の埋土で北壁と南壁が地山である。壁の立ち上りはほぼ垂直である。

【床面】 床面は平坦でやや南に傾斜している。南東部分が第Ⅱ層上面に行なわれた褐色の 貼り床で、他は住居掘り方(地山)と一致する。

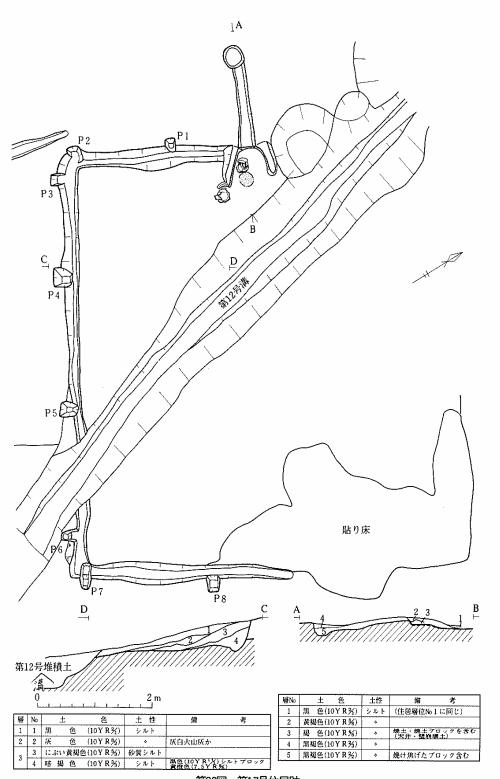
【桂穴】 壁を掘り込んで壁沿いに8個認められる。その配置は北東隅に2個、西壁に3個、 北壁、南壁に1個づつである。柱間隔は約2mである。ピットの平面形は長方形で、規模は大き さ25×30cm、深さ60cmである。柱穴が等間隔で配置されること、平面形が長方形で規模がほぼ 同じであることなどから壁柱穴と推定される。

【**周溝**】 カマドの部分をのぞいて壁沿いに認められる。断面「U」状で上幅は10~25cm、下幅は5~20cm、深さ約20cmである。

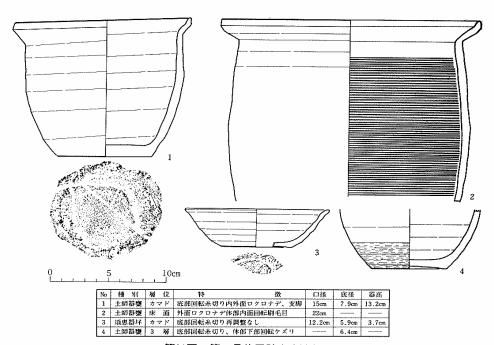
【カマド】 北壁中央付近に付設されている。カマドの方向はN-60°-Wである。残存する燃焼部側壁は褐色土を積み上げてつくられており、燃焼部中央にロクロ使用の甕を倒位に置いた支脚がみられる。規模は奥行60cm、幅50cmである。燃焼部はほぼ平坦である。煙道部は地山を斜め下りに掘り抜いており、先端に浅いピットが見られる。煙道の長さは1.7m、幅25cm、ピットは径30cmである。

【**堆積土**】 堆積土は住居北西部分4 が残っており3枚に大別される。第1層は黒色土シルト、第2層は灰色シルト、第3層は暗褐色シルトで将棋倒し状に堆積している。

【出土運物】 遺物はカマド内、カマド周辺の床、第1層から出土しているが量は少ない。 図示した遺物はカマド内出土の土師器甕(支脚)、須恵器坏と床面出土の土師器甕である(第 21図-1・2・3・4)。



第20図 第17号住居跡



第21図 第17号住居跡出土遺物

## 第20号住居跡

【**平面形・規模**】 住居の西側が削平されているが、残存する壁と周溝から隅丸方形と推定される。規模は南北軸長3.4m、残存北壁の長さは3mである。東壁の方向はN-0°-Eである。

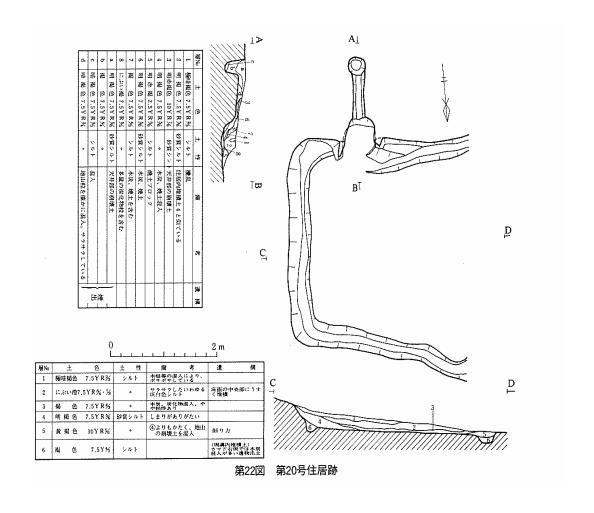
【壁】 地山を壁としている。壁は斜めに立ち上がる。残存する壁高は約40cmである。

【床面】 床面は平坦であり、西に傾斜している。床は住居掘り方(地山)と一致している。

【**周溝**】 カマドの部分を除いて壁沿いにみられる。断面は「U」状をしており、幅は15~35 cm、床面からの深さが約10cmである。

【カマド】 南辺東寄りに付設されている。カマドの方向はS-4°-Eである。燃焼部は住居壁を外に約50cm掘り込み、その両側の住居内側に褐色土を積み上げて燃焼部側壁をつくっている。規模は奥行50cm、幅50cmである。燃焼部底面は平坦である。燃焼部奥壁は約15cmの高さをもって立ち上がり煙道部へと続いている。煙道部は斜め上に向って掘り抜かれており、先端にピットが掘られている。煙道部の長さは1m、幅20cmであり、ピットは径30cm、底面からの深さ60cmである。

【堆積土】 堆積土は大別して4枚認められる。第1層は極暗褐シルト住居東側に分布し、



第2層はにぶい橙色(火山灰層)で住居中央部にレンズ状に堆積し、第3層は褐色シルトで床面の中央部に、第4層は明褐色シルトでカマド周辺分に分布する。

**【出土遺物**】 遺物はカマド・床面・周溝・第3層から出土しているが出土量は少ない。

【外周溝】 住居跡の北側には21号の外周溝を切って住居跡を弧状にとりまく溝である。南 斜面に対して開口し、断面形は「U」状である。溝の規模は幅40~50cmで、深さ20cmである。 溝の底面レベルは住居跡北東部が高く、南西部に向って低くなる。

### 第21号住居跡

【重複・平面形・規模】 第20号住居跡の外周溝を切っている。平面形はほぼ正方形で四隅が直角である。規模は南北軸長3.7m、東西軸長3.5mでわずかに南北方向に長い。西壁の方向はN-4°-Wである。

【壁】 地山を壁としている。ほぼ垂直に立ち上る。残存壁高は約40cmである。

【床面】 床面は平坦で極めてかたい。床は住居掘り方(地山)と一致する。東壁から約80 cm離れて東壁に平行し、周溝と直交する南北方向の溝がみられる。溝は長さ2.7m、幅8cm、深さ5cmである。

【周溝】 壁を全周する。断面形は「U」状をしている。上幅約10~15cm、床面からの深さ約10cmである。

住居の北東隅の周溝から西斜面にのびる地山掘り抜きの外延溝がある。規模は長さ3.6m、 上幅20cm、深さ10cmである。

【カマド】 北壁中央付近に付設されている。カマドの方向はN-3°-Wである。残存する燃焼部側壁は褐色土を積み上げて構築し、側壁はほぼ垂直に立ち上る。燃焼部の規模は奥行50cmである。燃焼部底面は浅くくぼんだ焼面がみられる。煙道部は燃焼部底面より斜めに20cm立ち上ってから地山を斜め下りに掘り抜いてつくられており、先端にピットが掘られている。煙道は長さ約1m、幅15cmでピットはほぼ円形で径40cm、深さ20cmである。

【堆積土】 堆積土は大別して3枚に分かれる。第1層は黒色シルトで、住居全体に分布し第 2層は灰白色シルトで住居中央にレンズ状に堆積している。粒形の大きいものが下部に堆積して おり、水成堆積の可能性がある。第3層は暗褐色シルトで壁際に分布している。

【出土遺物】 遺物はカマド・煙道・床面・堆積土から出土しているが少ない。図示した遺物はカマド出土の土師器坏・外周溝出土の土師器坏・堆積土No.3層出土の須恵器蓋である(第23図-1・2・3)。

【外周溝】 住居跡の東側に位置し、20号住居跡の外周溝に切られる弧状の溝である。溝は住居跡北西~南西の三方を幅9.5mで弧状に囲み、斜面に対して南に開口している。断面形は逆台形状をしており、規模は幅1m、深さ0.5mである。堆積土中からロクロ不使用の土師器坏・甕、須恵器坏が出土している。

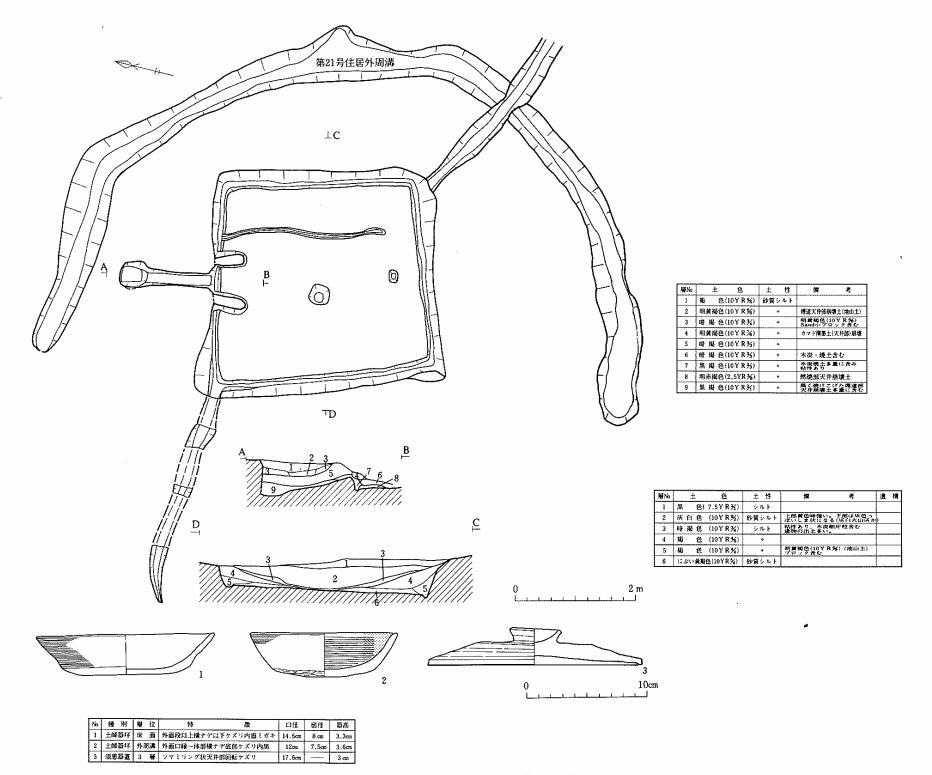
#### 第22号住居跡

【**重複・平面形・規模**】 第23号住居跡を切っており、第29号土壙に切られている。南側が 削平されているが残存する壁・周溝・柱穴から長方形と推定される。東西軸長は6.2m、残存 する西壁は3mである。西壁の方向はN-10°-Wである。

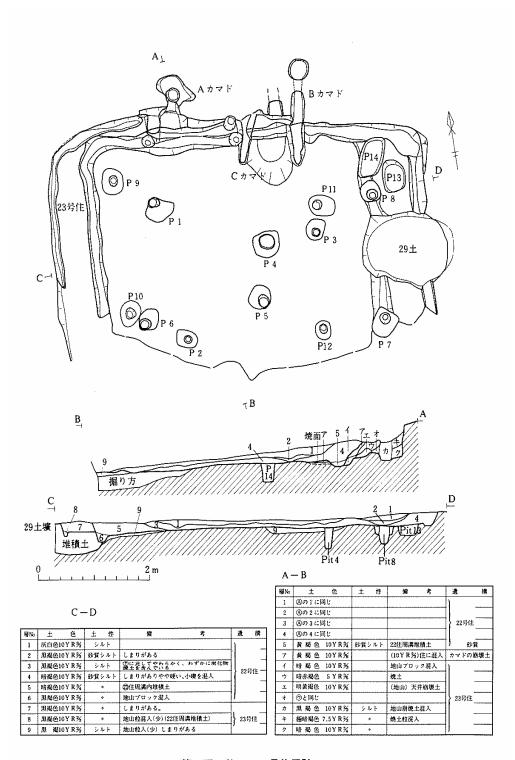
【**壁**】 壁は西壁と北壁の大部分が第23号住居跡の堆積土で、東壁と北壁東の一部が地山である。立ち上がりはほぼ垂直である。残存する壁高は床面から約30cmである。

**【床面】** 床面は中央部が住居掘り方(地山)と一致し、周辺部分は掘り方埋土の上面である。

【柱穴】 ピットが床面に6個( $P_1 \sim P_6$ )と北壁直下の周溝内に2個( $P_7 \cdot P_8$ )がみられ



第23図 第21号住居跡



第26図 第22・23号住居跡

る。すべて掘り方と柱痕跡が認められる。掘り方は楕円形で大きさは $60 \times 40$ cm、柱痕跡は円形で径20cmである。この中で $P_{1.2.7.8}$ が対角線上に配置され、それぞれを結ぶとやや不整の長方形になるので配置・規模などから主柱穴と考えられる。

【**周溝**】 壁沿いにみられ断面形「U」状である。上幅は約20~25cm、床面からの深さは20 cmである。

【カマド】 北壁中央に付設されている。カマドの方向はN-3°-Wである。燃焼部側壁は褐色土を積み上げて構築されている。規模は燃焼部の奥行1m、幅50cmである。燃焼部底面は皿状に窪んでいる。奥壁の段をさかいにして煙道部が掘りぬかれている。煙道は天井が残っているが立木と重なっているため煙出し部分は検出できなかった。

【**堆積土**】 住居内堆積土は3枚に大別できる。第1層は灰白色シルトで住居の中央上部に第2層は黒褐色シルトで住居中央の床面に、第3層は極暗褐色シルトで住居周辺の床面に分布する。

【出土遺物】 遺物は床面・カマド・ピット・周溝と堆積土から出土しているがNo.5層が多い。図示した遺物はカマド内出土の土師器坏・甕・堆積土出土の土師器坏・甕・甑・須恵器坏高台付坏・甕である(第25図-1~11)。

## 第23号住居跡

【**重複・平面形・規模**】 第22号住居跡・第29号土壙に切られている。南側が削平されているが残存する壁・周溝から平面形は長方形と推定される。規模は東西軸長が5.2m、残存する西壁の長さは4mである。西壁の方向はN-3°-Wである。

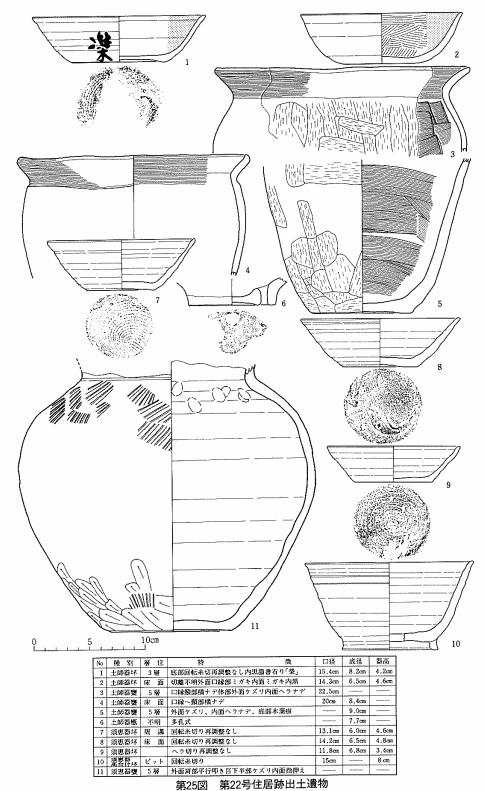
【**壁**】 壁は大部分が地山であるが、西壁の1部がピット堆積土である。ほぼ垂直に立ち上がり、残存する壁高は20cmである。

**【床面】** 床は西壁沿いに残っており、床面は住居掘り方(地山)の部分とピット埋土の上面の部分である。

【柱穴】 第22号住居跡の掘り方底面で4個のピット( $P_9 \sim P_{12}$ )が検出された。 $P_9 \sim P_{12}$ は掘り方と柱痕跡が認められる。掘り方は楕円形で大きさは $40 \times 50$ cmである。柱痕跡は円形で径20 cmである。この中で $P_9 \sim P_{12}$ はそれぞれを結ぶと平行四辺形状になるが、規模・配置などから主柱穴と考えられる。

【**周溝**】 北壁部をのぞいて残存する壁沿いにめぐる。幅は20~25cm、深さは20cmである。 断面形は「U」字状をしている。

【カマド】 北壁に2ヶ所付設されている。Bカマドは煙道だけが残る。煙道の方向はN-3°-Eである。煙道はほぼ水平に掘り抜かれ先端が円形のピット状になっている。残存する煙道



は長さ 1.1m、幅 20 cm、ピットは径 30 cmである。Cカマドは燃焼部の奥壁側と煙道部が残っている。カマドの方向はN-2°-Eである。燃焼部は褐色土を積み上げて構築し、幅は 30 cmである。煙道は燃焼部奥壁の段をさかいにして斜め下りに掘りぬかれており、先端には楕円形のピットが掘られている。煙道の長さは 35 cm、幅 20 cmである。

**【堆積土】** 22号住居跡に切られているため堆積土は西北部の壁沿いに黒褐色シルトがみられるだけである。

【出土遺物】 遺物はカマド・煙道・周溝から出土しているが量は少ない。図示できる遺物 はないが、カマド内よりロクロ不使用の内黒土師器坏破片が出土している。

## 第24号住居跡

【**重複・平面形・規模**】 25号住居を切っている。住居の東側が削平されているが、残存する壁・周溝からは方形と推定される。規模は南北軸長4.4m、北壁の残存長が2.7mである。西壁の方向はN-2°-Eである。

【**壁**】 地山を壁としている。床面からの立ち上がりは急である。残存する壁高は床面から 約40cmである。

【床面】 床は住居掘り方(地山)と一致している。床面の範囲は西壁から4m東まで確認できる。残存する床面の東北隅に南北に長い楕円状をしたわずかにくぼむ焼面がある。その大きさは60cm×35cmである。カマド燃焼部の可能性がある。

【**周溝**】 北壁西隅から西壁をへて南壁の途中まで認められる。断面は「U」状で幅約15~25cmである。床面からの深さは約10cmである。周溝とその掘り方が識別される。

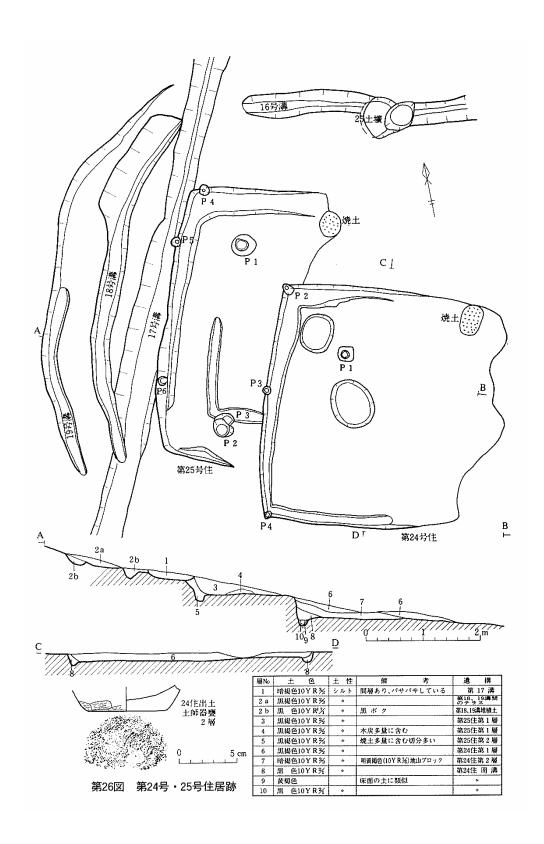
【柱穴】 ピットが床面東北部隅に1個と西壁に3個( $P_2 \sim P_4$ )みられる。西壁ピットの配置は東・西の両隅と西壁中央に1個づつであり、平面形が円形で径15cm、深さ40~55cmである。 等距離で位置すること、大きさが類似することから壁柱穴と推定される。

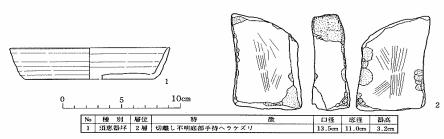
【**堆積土**】 堆積土は3枚認められ、将棋倒し状に堆積する。第1層は黒褐色シルトで住居全域に、第2層は住居西側床面に、第3層は壁沿いに分布する。

【出土遺物】 遺物はピット、第2層から出土しているが、量は少ない。図示した遺物は2層中から出土したロクロ使用の土師器甕底部で(回転糸切り離し→ケズリ)である(第26図)。

#### 第25号住居跡

【**重複・平面形・規模**】 第24号住居跡・第17号溝に切られている。住居の東側が削平されているが、残存する壁・周溝から平面形は方形と推定される。規模は南北軸長4.7m、北壁の残存長が2.3mである。西壁の方向はN-10°-Eである。





第27図 第25号住居跡出土遺物

【**壁**】 地山を壁としている。床面からの立ち上がりはやや急である。残存する壁高床面から30cmである。

【床面】 床面は平 である。床は住居掘り方(地山)と一致する。住居の南側に「厂」状の溝がみられる。残存する長さは西辺4.5m、南辺2.5mで、幅約20cm、深さ10cmである。残存する床面の北東隅に40cm×35cmの円状をしたわずかにくぼむ焼面がある。カマド燃焼部底面の可能性がある。

【**周溝**】 南西隅をのぞいて壁沿いにみられる。断面「U」状をある。幅約15~45cm、床面からの深さ約15cmである。

【**柱穴**】 ピットは床面に3個( $P_1 \sim P_3$ )、北壁に3個( $P_4 \sim P_6$ )認められる。北壁ピットの配置は北東隅に1個と北壁に2.5mの柱間隔で2個( $P_4 \sim P_6$ )である。 $P_1 \sim P_2$ は掘り方が楕円形で、大きさは30×40cmである。 $P_3$ には柱痕跡が認められ、その平面形は円形で径20cmである。壁に平行することで主柱穴の1部、 $P_4 \sim P_6$ は壁柱穴と推定される。

【**堆積土**】 堆積土は2枚である。第1層は黒褐色シルトで住居床面全域に含む。第2層は焼土を多量に含む黒褐色シルトで壁沿いに分布している。

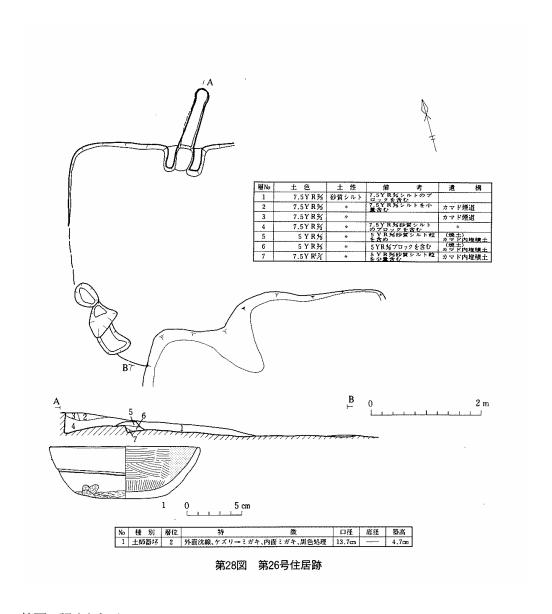
【出土遺物】 遺物は1・2層から出土しているが少量である。図示した遺物は、2層出土の 須恵器坏と砥石である(第27図-1・2)。

## 第26号住居跡

【**重複・平面形・規模**】 第27号住居跡・第28号土壙を切っている。住居の南側が削平されているが残存する北西コーナーから方形を推定される。残存する北壁は5.5m、西壁は1.5mである。西壁の方向はN-10°-Eである。

【**壁**】 壁は北西側が28号土壙の堆積土であり、北東側は地山である。床面から斜めに立ち上がり、残存する壁高は約10~15cmである。

【床面】 床面はやや平坦である。床は掘り方埋土上面である。床面は北壁から南へ3.7m

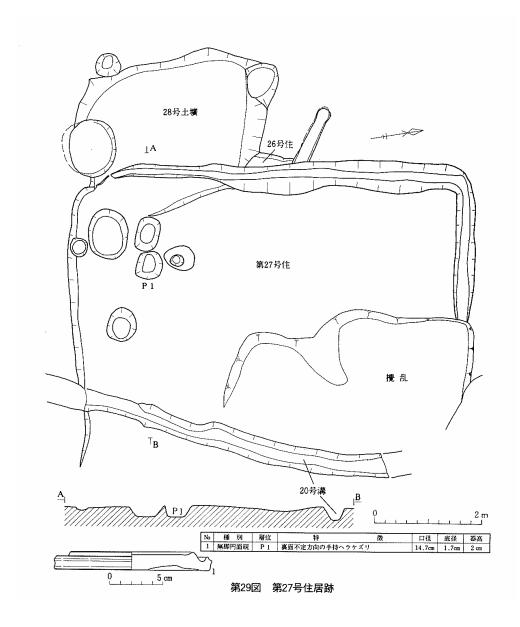


の範囲で認められる。

【カマド】 北壁西側寄りに付設されている。カマドの方向は $N-22^\circ$  -Eである。残存する燃焼部側壁は褐色土を積み上げてつくられており、燃焼部底面はほぼ平坦で、規模は奥壁40 cm、幅25cmである。煙道部は北側に斜め下りに地山を掘り抜いてつくられている。煙道の長さは1m、幅20cmである。

【堆積土】 堆積土は暗褐色シルトの1層だけであり、ほぼ床面全域に分布している。

【出土遺物】 遺物は床面と堆積土から少量出土している。図示した遺物は堆積層の土師器 坏である(第28図)。



## 第27号住居跡

【重複・平面形・規模】 第26号住居・第28号土壙に切られている。南側は削平されているが、残存する壁、周溝の状況から平面形は方形と推定される。規模は東西軸長6.5m、残存する西壁は5.5mである。西壁の方向はN-6°-Wである。

【**壁**】 壁は地山である。立ち上がりはゆるやかで、残存する壁高は残りのよい部分で50cmである。

【床面】 床面はやや凹凸がある。床は大部分が住居掘り方(地山)に一致し、西壁沿いが

掘り方埋土の上面である。

【**周溝**】 北壁と東壁沿いにみられる。断面は「U」状をしており、幅は15~20cm、床面からの深さが30cmである。

【出土遺物】 遺物は堆積層からロクロ不使用の甕の口縁部破片が少量出土している。なお 図示した遺物は27号住居跡の床面下にあるピット(P)から出土した円面硯である(第29図)。

## E. 掘立柱建物跡 (第30図)

掘立柱建物跡は9棟検出されている。第2区の北側と南側、第3区北側の緩斜面に立地する。

## 第1号棟

【**重複**】 第2号棟に切られ、第15号土壙、第25・26・27号溝を切っている。柱穴の中で $P_3$ は第25号溝、 $P_8$ は第27号溝、 $P_8$ は第15号土壙を切っており、 $P_{10}$ は第2号棟の $P_1$ に切られている。

【規模・方向】 桁行4間×梁間2間の建物跡で、棟方向がN-15°-Eである。建物の総間は桁行の西側列で6.3m (1.7m+1.5m+1.4m+1.7m)、東側列で6.25m (1.6m+1.5m+1.6 m+1.55m)、梁間の北妻列で4m (2m+2m)、南妻列で4.1m (2m+2.1m) となっている。柱穴には掘り方と柱痕跡が認められる。

掘り方は方形のものと円形のものがある。方形の掘り方の大きさは60cm~70cm×40cm~30cm で円形の掘り方の大きさは径50cmである。柱痕跡は円形で、大きさが径15~20cmである。

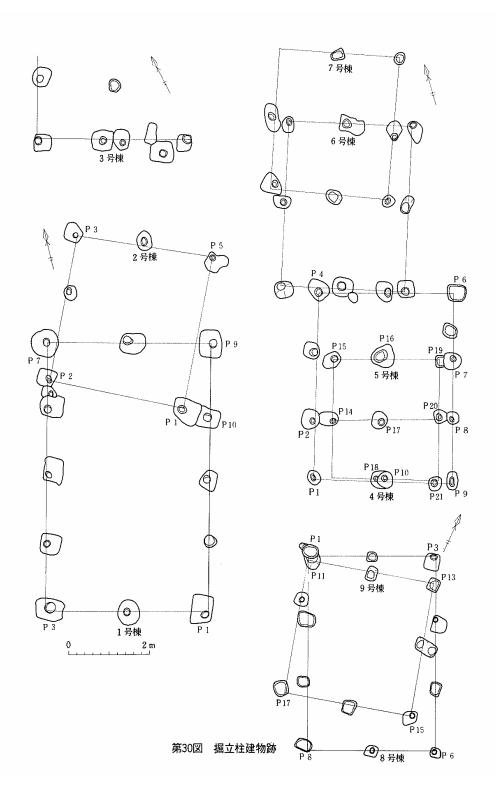
## 第2号棟

**〔重複〕** 第1号棟、第15号土壙、第28号溝を切っている。 P<sub>1</sub>は第2号棟のP<sub>10</sub>と第15号土壙を、P<sub>8</sub>は第28号溝を切っている。

【規模・方向】 桁行1間×梁間2間の建物で、棟方向が $N-24^\circ$  -Eである。建物の総間は桁行の西側列で3.5m、東側で3.6m、梁間の北妻列で3.45m (1.7m+1.75m)、南妻列で3.4mとなっている。柱穴には掘り方と柱痕跡が認められる。掘り方は方形のものと楕円形のものがあり、方形の掘り方の大きさは $40\sim60$ cm $\times50\sim70$ cm、楕円形の掘り方の大きさは40cm $\times50$ cmである。柱痕跡は円形で径15 $\sim20$ cmである。第 $1\cdot2$ 号棟の周囲には他にも柱穴が見られることで、建物跡が北東側に及ぶと推定される。

### 第3号棟

【**重複**】 1号住居跡と重複している。1号住居跡の床面で建物跡の南西隅が検出されているが、新旧関係は不明である。



【規模・方向】 南西隅から東西2間 (3m) ×南北1間 (1.5m) の柱列で、南北列の方向が  $N-16^{\circ}$  -E である。東西柱列の柱間寸法は1.5m+1.5m である。柱穴には掘り方と柱痕跡が 認められる。掘り方は方形のものと円形のものがある。方形の掘り方の大きさは $40\sim60$ cm×50 cmである。柱痕跡は円形で大きさが $10\sim20$ cmである。

北側にはこれと同一方向に柱列があり南側には対応する柱痕がなく北側は削平されているため不明だが、北側に建物が存在する可能性がある。

## 第4号棟

【**重複**】 第5号棟を切っている。ピットの切り合いは8個のピットの間で( $P_2 \rightarrow P_4$ 、 $P_7 \rightarrow P_8$ )、 $P_8 \rightarrow P_{20}$ 、 $P_{10} \rightarrow P_{18}$ )の関係が認められる。4号棟の北妻列が6号棟の南妻列と交わるが柱 穴の切り合いがないため新旧関係は不明である。

【規模・方向】 桁行3間×梁間2間の総柱の建物跡で棟方向はN-14°-Eである。総間は桁行4.4m、梁間3.4mであり、柱間寸法は桁行西側列が(1.5m+1.4m+1.5m)、東側柱列が(1.4m+1.4m+1.5m)、梁間は南妻列が(1.5m+1.5m)、北妻列が(1.7m+1.6m)、中央柱列が(1.6m+1.4m+1.5m)である。柱穴には掘り方と柱痕跡が認められ、掘り方の平面形は楕円形で大きさは50cm×20cm、柱痕跡は円形で大きさは約15cmである。

## 第5号棟

【重複】 第4号棟に切られている。

【規模・方向】 桁行2間×梁間2間の建物跡で棟方向はN-13.5°-Eである。総間は桁行3m、梁間2.6mであるが南東隅の柱穴が不明である。柱間寸法は桁行東列が(1.4m+1.6m)、梁間北列が(1.3m+1.3m)である。柱穴で大きさは約15~20cmである。

## 第6号棟

【**重複**】 第10号住居跡の床面で検出した。4号棟北側、7号棟の南側と重複しているが切り合いが認められないので新旧関係は不明である。

【規模・方向】 桁行2間×梁間2間の建物跡で棟方向は $N-14^\circ$  -Eである。総間は桁行4 m、梁間3. 1mである。桁行の柱間寸法は東西柱列とも(1.95m+1.95m)、梁間寸法は南北柱列とも(1.5m+1.5m)である。柱穴には掘り方と柱痕跡が認められる。掘り方は楕円形で大きさは $40cm\sim30cm$ で、柱痕跡は円形で大きさは $10cm\sim15cm$ である。

## 第7号棟

【**重複**】 第10号住居跡の床面で検出された。北東隅の柱穴が第3号土壙と重複して確認できなかった。第6号棟、第10号住居跡、第3号土壙との新旧関係は不明である。

【規模・方向】 桁行2間×梁間2間の建物で棟方向は $N-15^{\circ}$  -Eである。総間は桁行が3.4 m、梁間が2.8mである。柱間寸法は桁行東列が(1.9m+1.5m)、梁間南列が(1.5m+1.35 m)である。柱穴掘り方は楕円形であり、大きさは $40\sim50$ cm $\times30\sim40$ cmである。柱痕跡は認められるものと、認められないものがある。柱痕跡は円形で大きさ $15\sim20$ cmである。

## 第8号棟

**〔重複〕** 第9号棟・第24土壙と重複している。第8号棟の柱穴  $(P_1)$  が9号棟の柱穴  $(P_{11})$  を切っており、第9号棟より新しい。第24号土壙との新旧関係は不明である。

【規模・方向】 桁行3間×梁間2間で棟方向がN-90°-Wの建物跡である。総間は桁行が4.6m、梁間が3.3mである。柱間寸法は桁行の北側柱列が(1.5m+1.6m+1.5m)、南側柱列が(1.6m+1.5m+1.6m)で、梁間は東側柱列が(1.6m+1.7m)、西側柱列が(1.5m+1.6 m)である。柱掘り方は長方形もしくは、楕円形で大きさは(40~30cm×20cm)で、柱痕跡は円形で径約10cmである。

## 第9号棟

**〔重複〕** 第8号棟の柱穴に切られている。

【規模・方向】 桁行2間×梁間2間で棟方向が $N-10^\circ$  -Eの建物である。総間は桁行が3.2 m、梁間3.2mである。柱間寸法は桁行、梁間ともに(1.6m+1.5m)である。柱穴掘り方は長方形もしくは、楕円形であり、大きさは $40\sim50$ cm×30cm×20cmである。柱痕跡は円形で大きさは10cmである。 $P_{17}$ の埋土からロクロ不使用の土師器甕体部破片と角クギの一部が出土している。

#### F . 竪穴遺構 (第31 図)

竪穴遺構は2区の北側で検出されている。

【**重複・平面形・規模**】 中央が第12号溝に切られている。竪穴の南側にカマド状遺構がついている。竪穴の平面形は長方形で、規模は南北軸長2.5m×東西軸長2.1mである。長軸方向はN-30°-Wである。

【壁】 北側が第Ⅱ層を他は地山を壁とする。ほぼ垂直に立ち上り、壁高は30~40cmである。

【床】 床面は平担であり、床は竪穴掘り方(地山)と一致する。

【カマド状遺構】 煙道状部分の底面は床面から南に地山をやや斜め下りに掘り抜いており、 先端近くで幅が急にせまくなる。先端には楕円形のピットが掘られている。煙道状部分の長さ は70cm、幅は50cm、深さ約30cmである。先端のピットは径30cmで深さ50cmである。煙道の堆積 土は4層認められ、第1層は灰黄褐色シルト、第2層は黄橙色シルト、第3層は焼土層、第4層は煙 道状部分底面の木炭層である。ピット中から土師器甕が倒立状態で出土している。

【**堆積土**】 竪穴の堆積土は2層に大別され、第1層は黒褐色土砂質シルトで、第2層は黄褐色土シルトである。

【出土遺物】 図示した遺物は煙道先端のピット出土ロクロ使用土師器甕である。

#### 井戸跡 (第31 図2)

井戸跡は第10号住居跡西側の平坦面で1基確認された。確認面は第Ⅲ層である。

遺構はテラス状の掘り方とその中央の井戸跡からなっている。遺構の1部が調査区外にのびていることと、13号溝に切られているためにテラス状の掘り方は南側が不明である。

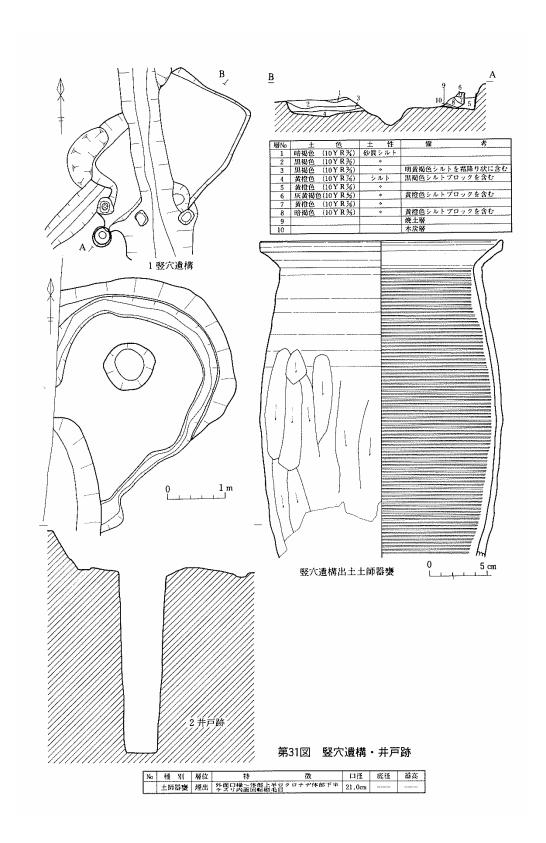
【テラス状の掘り方】 平面形は楕円形をしていると推定される。規模は上端幅3m以上、下端幅約1.2mで、壁高は約50cmである。掘り込みの周囲に壁の下端に沿って溝があり、南端が13号溝に切られている。溝の規模は上幅15~30cm、深さは5~10cmである。堆積土は黒褐色シルトである。

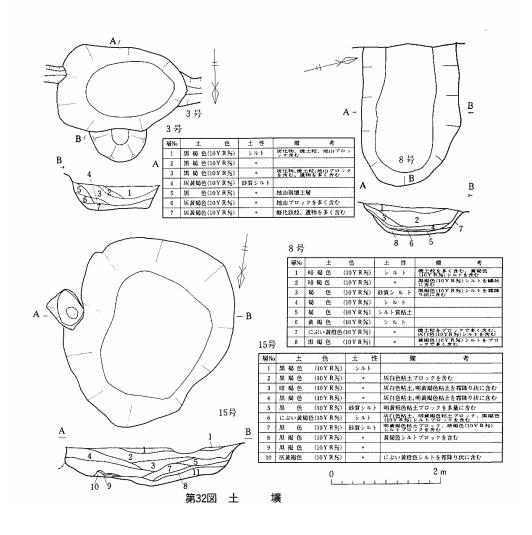
【井戸跡】 平面形が楕円形で大きさは長軸95cm、短軸80cmで深さは約3.1mまで確認した。 掘り方はほぼ垂直に掘られており、下部にいくにしたがって径が小さくなる。

遺物テラス状の掘り方堆積土中からロクロ不使用の土師器甕の口縁部と底部、須恵器甕の体部などの破片が出土している。

### **土 壙**(第32図)

土壙は1区で1基、2区で16基、3区で6基、4区で4基の計27基検出されており、確認面はほとんどが第Ⅲ層、他の遺構と切り合っている場合はその堆積土上面である。平面形は長楕円形(第8・9・10・12・14・17・26号土壙)、楕円形(第1・3・4・6・7・15・16・22・23・24・27・28・29号土壙)、円形(第13・18号土壙)、長方形(第19・20号土壙)の4種類がみられ、大きさは7m前後のもの(第7・9・10号土壙)、3m前後のもの(第3・12・13・15・26・28号土壙)、1m前後のもの(第1・4・6・7・14・16・18・19・20・21・22・23・24・25・27・29号土壙)である。底面は平坦なものと中央が皿状にややくぼむものがあり、壁の立ち上りはななめに立ち上るものが多い。遺物は底面・堆積土から土師器・須恵器片が出土している。これらは堆積土の上層から出土するものが多く底面・堆積土から出土するものは少ない。土壙出土の遺物は第33図に一括して示した。



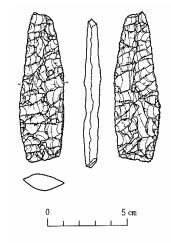


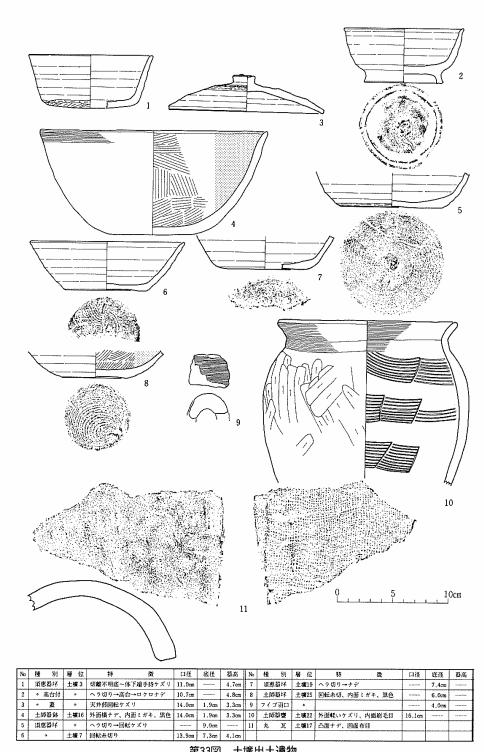
## I. 遺構外の出土遺物

ここで一括して取扱うのは、大半が遺構外の基本層位中から 出土したものである。これらには、土師器(坏・甑)、須恵器 (坏蓋)、瓦、砥石等がある。

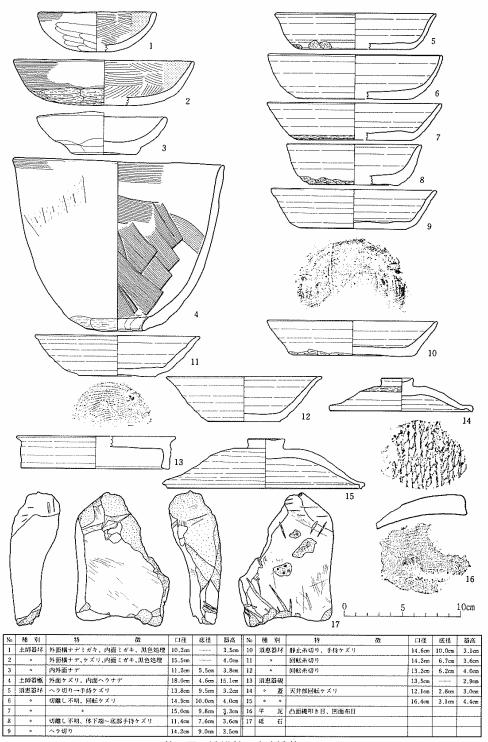
土師器坏は3点ある。丸底・内黒のものが2点あり、「椀」状を呈し口縁部が直立気味のもの(第34図-1)、口縁部、体部がやや内弯気味に外傾するもの(2)がある。他の1点は小型のもので、底部が台状で口縁部、体部が内弯しつつ外傾する(3)。

土師器甑は1点出土している(4)。非ロクロ・単孔式のものである。





第33図 土壙出土遺物



第34図 遺構外の出土遺物

第2表 竪穴住居跡一覧

切り合い関係	**		14・17土壌 → 2号住	4・5号住→3号住	5住・6住→4・A→3号住	5任・6任→4-В→4-А→3住	5 住 → 3・4・16号住	6 住 8 号土城	10号溝 → 8号住		3・16・18・19号土壙→10住	5 佳 → 16 佳 → 4・17 佳	16住 → 17住 → 12号溝		20住外周溝 → 21住	23注 → 22往 → 29土壌		25佳 → 24佳	25住 → 24住・周溝	27住 → 28土城 → 26住	27住 → 26住・28土壙
ĺ	长	地山 東側 壁沿い路床																			南側貼床
110	土布のカロ	N-10°-E	N-15°-E	N-13"-W	N-14°-E	N-19° - E	N-24° - E	N-2-E	東璧N-16°-E	N-10°-E	N-14° - E	N-29° - E	N-27°E	N-0-E	N- 4 - W	N-10°-W	N- 3°-W	N- 2° - E	N-10°-E	N-10°-E	M- 9-N
24	方 向				N-70°-W		N-67°-W		(1) S-80° - E (2) N-27° - E	N-16"-E		(1) S-30°-W (2) S-27°-W	N09-N	S-4°-E	N-3°-W	N-3W	(A)N-2°-E (B)N-3°-E			N-22° E	
7-	構築																				
ħ	位置				住居西辺 中央付近		北壁中央付近		住居北東隣	北壁中央付近		南壁中央付近	北壁中央付近	南辺東寄り	北壁中央付近	北壁中央	计			北壁西側寄り	
周涛	有·無	抽	無	無	有	有	有		掩		夲	神	車	有	車	極	护	有	桩		存
六	壁柱方				西壁 3 個(P <sub>1</sub> ~P <sub>8</sub> ) 南壁 2 個(P <sub>4</sub> ~P <sub>3</sub> )		13個(P <sub>5</sub> ~P <sub>15</sub> )				14個(P <sub>5</sub> ~P <sub>7</sub> )		8個西 縣 3個 8個北·南壁1個		-			$P_2\!\sim\! P_4$	$P_4 \sim P_6$		
中	来	10個(P1~P4)					4個(P <sub>1</sub> ~P <sub>4</sub> )				3 (图	4個(P <sub>1</sub> ~P <sub>4</sub> )			1個	7個	4個	1 個	3個	4個	4個
模	壁部	45~70cm	$5\!\sim\!10\mathrm{cm}$	5~ 7cm	25∼30cm	5~10cm	70 cm	10 ст	30 ст	30~10cm				40 cm	40 cm	30 cm	20 cm	40 cm	30 cm	$10\sim15\mathrm{cm}$	50 cm
درس	短軸	(4.5m)	(2.7m)	(2.6m)	(5.4m)	(3.3m)	( u )	(2.2m)	3 т	3.6m	З. т	33 m	3.9m	3 m	45m	2. m	2. m	1.7т	7.3m	1,5m	5.5m
規	中華	4.7m	5.7m	4.3m	5.7m	(5m)	7.6m	6.6m	3.5m	3.8m	ш 9	6.2m	6 m	3.4m	3.7m	6.2m	5.2m	4.4m	4.7m	5.5m	6.5m
近 市 非	는 글 -	方 形	方 形	为 形	方 形	隅丸方形	方 形	隅丸方形	長方形	正方形	正方形	方 形	方 形	隅丸方形	正方形	長方形	長方形	方 形	方 形	方 形	方 形
Œ EN.	Que H	1 号住	2号住	3号住	4-AŒ	4-BŒ	5号住	6 异佳	8号住	9号住	10号住	16号住	17号住	20号住	21号住	22号住	23号住	24号住	25号住	26号住	27号住

第3表 溝・掘立柱建物跡一覧

<b>∜</b> □		第25·26·27号溝]→ 1号棟→2号棟 15号土壙	→ 2 号模	新旧不明	4号煥		重複		号棟	号棟
II.	G-	第25·26·2 15号土壙	1.5 号末# → 2 号根 28 号海	1 号住との新旧不明	5号棟 → 4号棟		6 - 7 号棟重複		9号 → 8号機	9号 → 8号棟
留	摇	4.1 (2+2.1)	3.4	3 (1.5+1.5)	3 (1.5+1.5)		3 (1.5+1.5)	2.85 (1.5+1.35)	西3.1 (1.5+1.6)	
薇	#	4 (2+2)	3.45 (1.7+1.75)		3.3 (1.7+1.6)	2.6 (1.3+1.3)	3 (1.5+1.5)	2.8	東3.3 (1.6+1.7)	3.1 (1.6+1.5)
盟	析 行 東	6.25(1.6+1.5+1.6+1.55)	3.6		4.3 (1.4+1.4+1.5)		3.9 (1.95+1.95)		南4.7(1.6+1.5+1.6)	
柱	桁 行 酉	6. (1.7+1.5+1.4+1.7)	3,5	(1.5+)	-E 4. (1.5+1.4+1.5)	.5°-E 3 (1.4+1.6)	-E 3.9(1.95+1.95)	3.45 (1.95+1.5)	-W   1L4.6(1.5+1.6+1.5)	-E 3.1 (1.6+1.5)
10年期		N-15 - E	N-24"-E	N-16"-E	N-14°-E	N-13.5°-E	N-14°-E	N-15 - E	M−-90-N	N-10°-E
間数		4×2	$1 \times 2$	(1×2)	3×2	2 × 2	2 × 2	2 × 2	3×2	2 × 2
4 棒		1号棟	2 %	κ κ	4 %	5 %	<i>«</i> 9	" 2	° «	* 6

	430					***************************************																
3, and	カックに 医探 通		2 号薄 → 8 号簿		4号溝→6号溝		6 号溝 → 土塁		2号溝 → 8号溝		10号溝 → 8号住			13号簿 → 井戸		15号溝 → 20号土壙	16号溝 - 25号土壌	17号溝 → 25号住	17号溝 → 18号溝			21号溝 → 26异十烯
	[] []	N-81°-E	N-81.5°-E	N-82°-E	N-79° E	N-79°-E		NATURAL PARTICULAR PROPERTY.	N-3E	VanVenionistrationistra	N-81°-W	VALUE	N-12.5*-W N-64*-E	N-13°-W	N-5.5°-W	N-6.5°-W	N-77°-W	N-24°-E	N-20.5°-E	N-24"-E	N-21"-E	N-25° - E
	地账	0.4~0.7m	0.3~0.5m	0.4~0.6m	0.6m	0,4 m	0.6m	0.4 m	0.1m		0.2~ m		0.1~0.4m	0.4~0.5m	0.2m	0.2m	0.1m	0.1m	0.1m	0.2m	0.2m	0.2~0.7m
模	1	1.5~2 m	0.5~0.8m	1.5~3m	1.5~2m	1~2m	3 m	0.5m	m6.0		0.3~0.6m		0.4~1.2m	0.45~0.6m	0.2~0.5ш	0.2m	0.1~0.2m	0.1~0.5m	0.2m	0.2m	0.2m	0.2~1m
規	畢	3.5~4m	1.5~2m	$2\sim4$ m	3 m	3~4m	è	2~2.5 m	0.9~1.8m		0.4~9.8m		0.6~1.6m	1.1~1.4m	0.6~0.8m	0.4~0.6m	0.3~0.4m	0.46~0.7m	0.2~0.6m	0.4 m	0.4~0.6m	0.4~1.6ш
	故	(21 m)	(24 m)	(23 m)	(21 m)	(18m)	(16 m)		(11 m)	大	(18.8m)	大	(£0 m)	(e.8m)	(14.8m)	(13 m)	(4 m)	(10.2m)	(e.6m)	(7.8m)	(8 m)	(17 m)
*****	ON SEE	1号溝	2号簿	3号簿	45字	9沿鎌	皇子 9	7号溝	製台8	推出6	10号簿	11 忠建	12号溝	13号簿	14号簿	15号涛	16号簿	17号溝	18忠渊	1950年	<b>第402</b>	21 岩瀬
1	×.	1 K									23  X				2  X		<b>₽</b>					

須恵器坏は、7点出土している。このうち5~10は、底径が口径に比して大きい扁平なもので、

9を除いて底部および体部下端に再調整が加えられるものである。11は底径が口径の 以下と小さく回転糸切りで底部が切離されている。

須恵器にはこの他に蓋が2点出土している。一つは短頸壺と組むと思われるもので、水平の天井部に垂直な口縁部がまわるもの(13)、他は中央部が凹む、ツマミがつき口縁部が垂直に折れる形態のものである(14・15)。他に砥石1点(12)と、縄叩き目のある丸瓦片1片がある(16)。

第4表 土壙一覧

			•••••		Ī	••••••	•••••	规	<del></del>	ę.	į							
区分	土壤No	4	面	形	長	帕	紐	軸	Sec. 5.	Uta.	,.,		ガ	敓	16	新	備	書
					上帽	下幅	上幅	下端幅	深さ	<u> </u>	底	面						
1	1	ੂ	μĵ	形	1.48	1.16	1.24	1,1	1	ほば垂直	平	担			1 号溝 →	1号土壙		
2	2		欠															
ΙX	3	桥	Pl	形	2.4	1,5	1.5	1.0	0.73	ななめに立ち上る	中央がや	やくぼむ			3 号土壙	→ 10号住	8	Ç
	4	楷	p	形	0.8	0.55	0.6		0.1~0.15	ななめに立ち上る	四凸岩	がある						ununn
	5		欠															
	6	楷	P	形	0.75		0,7			ななめに立ち上る	Ш	状						
	7	惰	PJ	形	1.6	0,5	0,75	0,35	0,34	ななめに立ち上る	81	状					8	С
	8	技	桥戸	形	(2.5)	(2.3)	1.7	1.0		ななめに立ち上る	平	担			6 号住 →	8 号土壙		
	9		欠															
	10		欠										**********	***********				
	11		欠															
	12		欠															
	13	*******	門		4	2				ななめに開いていく					13号土壤	~ 12号溝	9 (	Ĉ~
	14	長	格門	形	1.85	1.75	1.1	0.85	0.1	ななめに立ち上る	坪	担						
	15	楷	円	形	3,5	2.2	2,85	1.7	0.7	垂直に立ち上る	M	伏					9 (	C ~
	16	桁	pj	形	1.4	0.7	0.7	0.4	0.3	ななめに立ち上る	华	£11			16号土坡	→ 10号住		
ĺ	17	長	楕	円	7,1	3,5	2.0	1.5	0.4	ななめに立ち上る	ą.	担					9	С
	18	PJ		形	0,85	0,65				ななめに立ち上る	Ш	状			18号土壤	→ 10号住	8	С
	19	Æ	方	形	1.75	1.2	1.0	0.85	0.5	垂直に立ち上る	乘	担			19号土壤	→ 10号住	8	С
3	20	网	九投力	ī形	0.5		0.4		0.2	ほぼ垂直に立ち上る	中央がや	やくばむ			15号溝 → 2	5号土壙		
X	21	方		形	0.5	0.2	******		0.2	ななめに上る	中央が	くぼむ						
	22	不生	8格尸	形	1.1		0.8		0,15	ななめに立ち上る	中央が	くぼむ			8 ・ 9 号板	立と重複	8	С
	23	楕	円	形	1.0	0.7	0.65	0.45	0.15	ななめに立ち上る	平	担						
	24	楕	円	形	1,1	0.95	0.95	0.85	0.19	ななめに立ち上る	中央が	くぼむ						
Ì	29	楷	pj	形	1,5	1.4	1.1	1.05		ほぼ垂直に立ち上る	平	担			22・23住 -	29号土壙		
4	25	檊	pj	形	0.75	0.65	0.5	?		ほぼ垂直に立ち上る					20号住外周港	→25号土壙	9 C	;~
K	26	提	脩円	形	3.6		1,9			ななめに立ち上る	平	担			21号溝 →	26号土壙	8	С
	27	楷	PJ	形	1.1	1	0.9	0.9		ほぼ垂直に立ち上る	中央がや	やくぼむ:		-	28号土壙	→ 27号土樓		
	28	惰	Ħ	形	3.7		2,9			ななめに立ち上る	平	担			21溝→28土場	<b>→27号土壙</b>	8 C	`~

# Ⅳ. 考 察

## 1. 出土土器の年代

今回の調査では、遺構ごとの土器の出土量がすくなかった。そのため分類を行った後その共 伴関係から特定の時間的まとまりをもつ土器群を設定し、これを他遺跡と比較してその所属年 代を決定するという方法はとりにくい。そこで遺構の重複関係からその出土土器の相対的な新 旧関係を得ることとし、個々の遺構の出土土器の特徴を明らかにすることで他遺跡の調査成果 と比較してこれらの土器の所属年代を確定したい。

各遺構間の重複関係は第5表の通りである。

これをもとに、遺構ごとの出土土器の特徴をみれば、その間にいくつかの段階が見出せる。 そして、これらは全体として8世紀から9世紀の間に位置づけられている土器群の中に類似する ものがある。その根拠となるべき出土土器の特徴については各段階に属する土器を説明するな かで述べることとし、ここでは8・9世紀に属する土器群の研究の状況について簡単にまとめて おく。

8世紀代の土師器については氏家和典氏によって国分寺下層式が設定され(氏家:1957)、これがロクロ使用の土師器の一群に先行し、その年代は陸奥国分寺が創建された8世紀中葉以降であるとされてきた。その後、白鳥良一氏が多賀城跡の調査成果から表杉ノ入式の初源が9世紀初頭にあることを明らかにした(白鳥:1980)ことから、国分寺下層式は必然的にその下限を8世紀末におくことになった。また8世紀後半にはさらに2段階の土器群の変遷が指摘されている(丹羽 茂ほか:1981)。

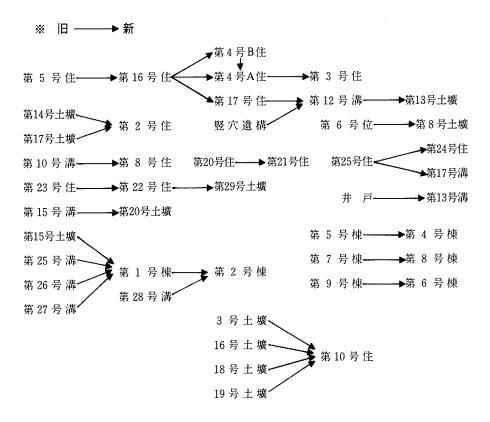
一方、国分寺下層式に先行する8世紀前半の土器群については、氏家氏が栗囲式II類を設定していた(氏家:1968)が、近年の志波姫町御駒堂遺跡の調査(小井川和夫:1982)では8世紀前半の時期に3つの土器群の変遷が認められ、この時期の具体相が明らかになった。ただし、これらの土器群が関東の真間式系の土師器を中心に構成され在地のものが乏しいことから、東北北半と南半の土師器における地域性を越えて8世紀前半を代表する型式を設定するには至らなかった。

これに続くロクロ土師器の一群はさらに細分が試みられている現状である。

9世紀初めの時期の土師器については、県南では亘理町宮前遺跡(丹羽 茂:1983)、県北では色麻町上新田遺跡の調査(小井川和夫:1981)がその実体を明らかにしている。

宮前遺跡においては、国分寺下層式終末期のものに器形的にも器面調整の方法においても強い類似性をもち、底部がヘラ切りによって切り離されるか体部下端から底部にかけて回転ケズリの再調整を加えられるものが多い、といった特徴のあるものが出土しており、ロクロ技術導

第5表 遺構の新旧関係



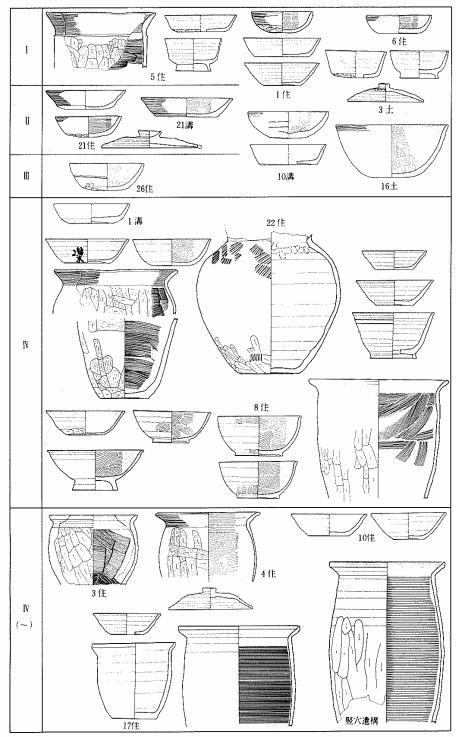
入直後の土師器であるとされている。

また上新田遺跡においては、第8号住居跡から出土した土師器坏がヘラ切りによって切り離されたものか、回転ヘラケズリの再調整によって切り離しが不明なもののいずれかであること、底部が丸底気味であることからこれを表杉ノ入式の早い段階に位置づけている。

これらに後続するものとしては、白石市青木遺跡(小川淳一:1980) ・大河原町台の山遺跡 (阿部博志:1980)等のヘラ切りの坏とともに回転糸切りの坏を共伴する土器群が挙げられる。

以上のようにまとめたうえで、本遺跡の各遺構に伴う土器群を上記の編年観に位置づけると 次の4段階が想定される(第35図)。

**第1段階**(第5号住居跡) 口縁部内面に浅い沈線をもち体部下端から底部にかけて回転ケズリを加えているヘラ切りの須恵器坏、体部下端に回転ケズリの施される須恵器高台付坏、頸部に段をもち最大径が口縁部にある土師器甕とが共伴している。内面に沈線のある須恵器坏は



第35図 土器の変遷

御駒堂遺跡第6号住居跡の出土土器に類例がある。これは切り離し後体部下端から底部にかけて回転ケズリが加えられているため丸底気味となっており、口縁部内面に浅い段がめぐるものである。なお、第6号住居跡は第2群土器段階とされたものである。以上のことから、第1段階とした第5号住居跡出土の土器は8世紀前半の所産であると考えられる。

第2段階(第21号溝) 体部下端の外面に段をもつ土師器内黒坏が一点ある。これは段以上が横ナデ、段以下がヘラケズリされるもので、高清水町観音沢遺跡(加藤・阿部:1980)に出土例(坏Ⅱ2c類)がある。報文では段を有する坏を持たない志波姫町糠塚遺跡(小井川・手塚:1978)に先行する国分寺下層式の前半に位置づけられるものとしているが、本遺跡においても第3段階とした丸底で体部外面に沈線のある土師器内黒坏を出土した第26号住居跡にこの第21号溝が切られていることから確かめられる。

第3段階(第26号住居跡) 外面の体部中位に浅い沈線が施されたもので、丸底である。体部下半から底部がヘラケズりされ、体部上半はケズリ後ミガキが加えられている。これは、前述のように糠塚遺跡においてAII類と分類されたものに相当し、国分寺下層式でも後出的なものとして8世紀後半という所属年代が与えられている。本遺跡においても、この第26号住居跡が外面の体部下端に段をもつ土師器坏を出土した第21号溝と、第27号住居跡を切っていること、第27号住居跡内にはこれに伴うかこれより古いものと考えられるピットがあり、その中から8世紀前半の所産とされている無脚硯が出土していることから、上記のことは裏付けられよう。

なお、第1~第3段階として一括したもののなかには、第3号土壙出土の須恵器坏・高台付坏・ 蓋のように第1段階に含められる可能性をもつものもあるが、ここでその技法的・形態的特徴を とりあげてさらに分類することは難しいことから大きく8世紀代としてまとめた。

第4段階(第1号溝・第8号住居跡・第22号住居跡) まず、第1号溝出土のロクロ土師器坏であるが、口径に比して底径が大きく底部が厚いもので、ヘラ切りで切り離され体部下端に回転ケズリが加えられているのが特徴である。こうした特徴をもつものは県南では宮前遺跡第20号住居跡から出土しており、県北部でも上新田遺跡第8号住居跡から、器形は本遺跡のものより口縁部が開き気味となるが同一の技法的特徴を共有するものが出土している。したがって、これらについては両遺跡の報文において指摘されているように、土師器製作にロクロ技術が導入された段階・9世紀初頭のものと考えてよい。

次に、第22号住居跡出土の土器についてである。再調整によって切り離し不明の丸底気味のもの・回転糸切りで再調整がなく体部が直線的に外傾し口縁が外反するものの2種類の土師器坏(前者ナデ、後者ミガキ後黒色処理)、非ロクロの土師器長胴甕・回転糸切りで再調整のない須恵器坏・つラ切りで再調整のない須恵器坏・回転糸切りの高台付坏・体部上位に沈線のめぐる須恵器高台付坏・肩部と体下部に平行叩き目がつき体部下半にヘラケズリが加えられる須

恵器甕などがある。このような2種の土師器坏の組み合わせは、高清水町西手取・手取遺跡第1群土器(早坂・阿部:1980)・高清水町五輪C遺跡第5・11号住居跡(小野寺祥一郎:1979)にみられ、どちらも回転糸切りで再調整のないものに先行することが明らかにされている。またこの切り離し不明の坏は全体に厚く、底部も丸底気味であることから表杉ノ入式の早い段階に位置づけられるのに対し、回転糸切りで再調整のないものも口径に対する底径の比が1:0.53と器形的に古い形態をのこしていることが明らかである。以上のことからこれらの土器も9世紀前半のものとしてよいと思われる。

8号住居跡からは、回転糸切りで体部下端に手持ちヘラケズリが加えられたもので体部が内 弯気味に外傾し口縁部がやや外反する土師器坏と体部が内弯し口縁部が直立する器形で断面に 三角形の高台のつくもの・体部が内弯しつつゆるやかに外傾し口縁は外反するものの2種の土師 器高台付坏(前者は内外面ともミガキ・内面黒色処理、後者は内面ミガキ後黒色処理)・ロクロ使用の土師器甕が出土している。こうした土師器坏は9世紀初頭に位置づけられる築館町佐内 屋敷遺跡第28号住居跡にみられ(森 貢喜:1983)、体部が直線的に外傾し口縁部がやや外反する坏部の浅い土師器高台付坏と共伴している。次に土師器高台付坏についてであるが、上 新田遺跡第10号住居跡からは手持ちヘラケズリと回転ケズリの再調整によって切り離しの不明な土師器坏とともに前者の土師器高台付坏が出土しており、これらに他の9世紀初頭とされる土 器群よりも後出的な特徴が指摘されている。

これらのことから、第4段階の土器は9世紀前半という年代の中におさまるものと考えられる。 したがって、本遺跡の土器は8世紀前半から9世紀前半という幅をもった変遷をたどっている といえる。なお、第34図第4段落の下半は第4段階あるいはそれ以降か判然としないものを一括 した。

## 2. その他の出土遺物

土器以外の出土遺物には、瓦・硯・羽口・砥石・石器・鉄製品がある。

## 亙.

瓦は5点出土している。うち1点が平瓦で、他は丸瓦である。

平瓦は、第16号住居跡出土のもので、凸面凹面ともにナデを施し、側面・木口面のヘラケズリを行っているものである。多賀城跡調査研究所進藤秋輝氏の御教示によれば、製作技法、 形態は多賀城 I 期のものと同じであるが胎土については多賀城に瓦を供給していた木戸・日の 出山・大吉山の三瓦窯跡のいずれとも異なっているとのことである。

ついで、丸瓦についてであるが、粘土紐まき上げによってつくられたものである。

第4号住居跡カマド出土のものは、欠損のため玉縁がつくかどうかわからないが、円筒型に粘土紐を巻き付けてそれを平行叩き目の叩き具で締めた後ロクロナデ調整が施されるものである。 側面および端部はヘラケズリされる。凸面には深く刻まれた平行叩き目が残る。

同じく第4号住居跡の周溝からも丸瓦が出土している。粘土紐巻き上げの後平行叩き目を施 しているが、その後のロクロナデによって不明瞭になっている。側面および端部はヘラケズリ されている。

第4号住居跡からは、ロクロ土師器甕が出土していることからこれを平安時代の所産と考えたい。

17号土壙堆積土からも同じ形態のものが出土している。これは第4号住居跡周溝出土のものと同様、ロクロナデ調整によって叩き目(第一次)が不明瞭となっているものである。

その他に遺構外出土のものが一点ある。これは、粘土紐巻き上げによるもので、縄叩き目を 凸面に残すものである。

#### 硯

無脚の円面硯(径14.6cm、器厚1.5cm)で、通常の円面硯の脚部を取り去り硯面をのみ残したかたちである。有堤のものでその硯面は使用により平滑となり中央部がやや凹んでいる。

裏面は、ロクロから切り離された後全面に不定方向の手持ちヘラケズリが施され、さらにその 後で中心と側縁との中間部分が刷毛目を施すことによって周囲よりやや凹められている。

こうした形態の硯の出土例をみれば、関東以北では東京都(武蔵国分寺跡)、群馬県(富岡市本宿・郷土遺跡、境町上渕名遺跡)、山形県(米沢市笹原遺跡)、秋田県(秋田城跡)等がある。

博崎彰一氏はこれらを8世紀の所産とし、なかでも有堤のもので内堤が外縁より高いものをより古式のものとしている。この見解に従えば本遺跡出土のものは8世紀段階でも比較的早い時期に属することになる(樽崎:1982)

#### 四屎

2点出土している。

1点は第5号住居跡からのものである。外径5cm、孔径2.5cmと推定される。外面は、火熱のためガラス質状に変質しており器面調整は不明である。端部が最もガラス質化が激しいことから、この端部が炉への送風口であった可能性が強い。

もう1点は、3号土壙出土の端部の破片である。外径4cm、内径2.5cmと推定される。外面にはロクロナデの痕跡が見られ、粘土紐巻上げの痕跡が残っている。

#### 砥石

砥石は、6点出土している。1点を除き長さ9cm~11cm、幅5cm~8cmほどである。ほとんどが住居跡に伴なうものである。特に9号住居跡の床面からは長さ20.5cm、最大幅9.9cmの大

型品が出土しており表裏両面と両側縁の6面を砥面とし端部および側縁部に研摩溝がみられる一面は使用によって著しく凹んでいる。細かいが、他の5点に比してやや荒い。またこれより小振りの2点が出土している。1つは、6面全部を砥面としているもので、石質は細かい。他の1点も6面を使用しており研摩溝もみられる。石質は他の2点よりも緻密である。これら3点が床面で検出されたことから、大型のものは荒砥他の二者は中砥・仕上砥と考えることもできよう。

25号住居跡埋土および2号溝中からも、1点づつ出土している。前者は表裏と両側面を砥面と したものであり、後者は6面全てを破面といるもので使用によって中央部が最も幅が小さくなっ ている。一端には研摩溝がみられる。

遺構外出土のものは表裏および両側面を使用しているもので、裏面には多くの研摩溝がみられる。

### 石器

石匙と石槍がそれぞれ1点づつ出土している。両者とも石質は珪質頁岩である。

石匙は、1号溝第3層から出土している。縦長の剥片を素材とし、側縁に刃部をつくり出した ものである。 (第7図8)

石槍は、第20号土壙堆積土出土のもので、両端が欠損している。 (第32図1)

## 鉄製品

鉄製品には、釘・刀子・鏃・鉄斧があるが、第5号住居跡堆積土出土の鉄斧を除いて特に図示していない。鉄斧は長さ7.2cm、最大刃部幅4.4cmで、柄の挿入部は袋状となっている。(第13図5)

# 3. 遺構の年代

今回の調査で発見された遺構の年代については、その出土土器の検討によって奈良時代前半 (8C前半) から平安時代初期 (9C前半) までの間に四つの段階のあることが確かめられている。 その他四つの段階のいずれに属するかを限定できない土器を出土している遺構についても、奈良時代あるいは平安時代というおおまかな年代は与えられるものがある。 それらをまとめると第6表のようになる。また遺構の重複による新旧関係をもとにすれば、各段階にさらに細かな遺構の変遷が予想される。

ここではまず、宮沢遺跡を代表する遺構である外郭施設の年代について考察する。 今回明らかになった外郭施設の新旧関係は次のとおりである。

旧 新

第2築地─→土塁

#### 6号溝→ 十塁

### 6号溝 → 4号溝 (第2築地に伴う溝)

これらの関係から、6号溝→外2築地→土塁という関係が成立する。土塁と築地の間に重複があることは既に知られていたが、今回の調査においてもそれが裏付けられることになった。築地2条と土塁はそれぞれ継続的に一定の時期差をもって機能していたと考えられよう。

その機能した年代を推定する資料はごく少ない。僅かに、第1築地に伴う1号溝から9世紀前半に位置づけられる土師器坏などが出土しているにすぎない。しかし昭和51年に行われた東北自動車道関係の調査(斎藤・高橋・真山:1980)や今回の調査でも、築地・土塁の外郭施設の内側からは数多くの竪穴住居跡が発見されており、宮沢遺跡の内部施設として重要な位置をしめていたと考えられる。したがって、竪穴住居跡の変遷する8世紀前半から9世紀前半までという時期幅をそのまま築地・土塁の存続期間と推定することができよう。

	第6表 遺構	の年代
第1段階	5住	1 住 25住 27住 土坡 3.16.18.19 (20住?)
第2段階	21住	(2012.7)
第3段階	26住	
第4段階	8住 22住	2 住 3 住 4 住 10住17住 竪穴 土壙15.17.25 (第 4 段階~) 第 1 · 2 号棟

第1築地に伴う第1溝からは、第4段階の土器が出土しているが、遺溝の構築年代を示すかど うか不明である。ただし、すくなくとも第4段階の時期まで溝は埋まりきってはいなかった可能 性が強い。

掘立柱建物跡は出土遺物がないので、直接年代を検討できない。その中で第1・2号棟については、第1号棟がロクロ土師器坏片を出土した第15号土壙を切っていること、さらに第2号棟が第1号棟を切っていることから、第15号土壙の年代より新しいことになる。

その他の溝・土壙・竪穴遺構については出土遺物からそれぞれ第4-6表のような年代が想定 される。

### 4.各段階の遺構について

前述のように、年代をある程度特定できる遺構は築地2条・土塁1条・竪穴住居跡13軒・掘立 柱建物跡2棟・竪穴遺構1基・土壙6基である。これらを大きく奈良時代と平安時代初めとに分け てみると、次のようになる。

奈良時代-この時期の遺構は竪穴住居跡7軒・土壙4基があり、また築地(あるいは土塁も)

が存在している。竪穴住居跡は第2区で3軒、第4区で2軒の重複が認められ、出土土器からみた3時期の区分に消極的ながら根拠をあたえている。竪穴住居としての形態・構造は同時代のものと特に違いはみられないが第5号住居跡に平面形が方形(長方形)の壁柱穴のあることは特記される。築地・土塁については、この中に平安時代まで存続するものがあることを前提としてここでみると、遺跡の外側から土塁→築地→築地の順で並行しており、それぞれに溝が伴っている。この位置関係は遺跡の西辺北部にあたる愛宕山地区と同じであるが、北辺西部の長者原地区における築地→土塁→築地という順序とは異なっている。したがって、土塁が各地区の間にある湿地も含めて連続して構築されていたかどうかは不明にしても、位置関係から見れば上記地区の間だけでも2個所で築地と交差していることになる。また、長者原地区の調査では内がわの築地よりも土塁が新しいことが確認されているから、3条の外郭施設で土塁が最も新しいことになる。

平安時代-築地・土塁を除くと、竪穴住居跡7軒・掘立柱建物跡1棟・竪穴遺構1基・土壙2基がある。竪穴住居跡は第2区で2軒の重複が、掘立柱建物跡は第3区で2棟の重複があり、この時期が2区分される可能性があるという土器の検討結果と合致する。形態・構造については奈良時代の場合と同様であり、また方形の壁柱穴も第4・17号住居跡の2軒に認められる。掘立柱建物跡は2棟あるが、昭和51年の愛宕山地区の調査同様、柱穴・柱間隔とも他の城柵・官衙遺跡のものと比較すると小規模である。竪穴遺構は小規模で内部に住居的特徴を持つ施設がないが、煙道状の施設が遺構外に延びることから、住居跡の可能性が強い。

なお、奈良・平安時代いずれも竪穴住居跡と掘立柱建物跡はその軸線が北から東に 10 度ほど振れた方向に集中する傾向がある。竪穴住居跡については仙台市郡山遺跡(木村浩二他:1981 ほか)でも同様な発見がなされているが、多賀城跡(菊田 徹:1976 ほか)などでは必ずしもその方向は一定していない。したがって、この特徴については住居群を通る通路との関係・共存する掘立柱建物跡との関係などさらに検討すべき点が残されている。

また、土壙や築地、土塁に伴わない溝などについては、性格が不明である。

このように、築地・土塁の存在により城柵・官衙遺跡と考えられる本遺跡では今回を含めて 3 地区の調査が実施され、内部施設としては竪穴住居跡と小規模の掘立柱建物跡が主な遺構で ある。数では前者がかなり多く、内郭の存否を含め城柵・官衙的な施設があまり判明していな い現在においては、外郭線近くの遺構として竪穴住居が重要な位置を占めている。

# V. まとめ

- 1.遺跡は宮城県北部の古川市宮沢・川熊・長岡に所在し、築地・土塁・溝が丘陵と低地をとりこんだ形で一定の地域を区画している古代の城柵・官衙遺跡である。その範囲は東西約1400 m、南北約850mに及ぶ遺跡である。今回の調査は遺跡北東部にあたり、その調査面積は約4200 m<sup>2</sup>であった。これまで築地・土塁等の外郭施設が途切れていると考えられてきた部分にそれらの基底部が残存していたこと、外郭施設の内側に溝・竪穴住居跡・竪穴遺構・掘立柱建物跡・井戸が存在することなどが明らかになった。
- 2. 築地・土塁・溝は近接して東西方向にのびている。これらは外側から土塁→築地→築地と並行しており、それぞれに溝が伴なっている。土塁と築地の並ぶ順序は遺跡南西の愛宕山地区に見られる順と同じであるが、長者原地区の築地→土塁→築地の配列とは違っていることから築地・土塁が愛宕山地区と長者原地区の間で交又することになる。これらの年代は8世紀前半~9世紀前半に位置づけられるが、機能した期間は時期差が考えられる。
- 3. 内部から発見された竪穴住居跡、掘立柱建物跡・土壙などの遺構は出土遺物から8世紀前半から9世紀前半までの間に4時期の変遷が認められる。

これらの遺構群は、遺跡の中で東側丘陵東斜面・東側丘陵南西斜面・西側丘陵東斜面にそれぞれ立地している。

このうち奈良時代の住居跡は、第27号住居跡床面で検出されたピットから硯が出土している こと、須恵器の数が土師器に比してかなり多いことなど他の一般的な集落遺跡と若干異なる様 相を示している。

表杉ノ入式期に入ると住居跡の数が増加し土壙・溝等もその数を増す。外郭施設の1号溝はこの時期に埋まりはじめている。なお、住居跡の後に掘立柱建物跡が建てられる。

# 引用・参考文献

阿部・千葉(1980): 「台の山遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』Ⅱ 宮城県文化財調査報告 書第62集

氏家和典(1957):「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14集

(1968):「仙台市燕沢善応寺横穴古墳調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第3集

氏家和典(1967):「陸奥国分跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』

小川淳一(1980):「青木遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』IV 宮城県文化財調査報告書第71集

小野寺祥一郎(1979): 『五輪C遺跡』 宮城県文化財調査報告書第61集

加藤・阿部(1980):「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』IV 宮城県文化財調査報告書第72集

菊田 徹(1976): 「多賀城内発見の竪穴住居跡」『研究紀要』Ⅲ 宮城県多賀城跡調査研究所

木村浩二他(1983):『郡山遺跡Ⅲ』 仙台市文化財調査報告書第46集 小井川和夫(1981):「上新田遺跡」 宮城県文化財調査報告書第78集

小井川・小川(1982): 「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』IV 宮城県文化財調査報告書第83集

斎藤・高橋・真山(1980):「宮沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅲ 宮城県文化財調査報告書第69集

境町教育委員会(群馬県)(1975): 『明神遺跡発掘調査報告書 附上渕名出土古瓦・硯調査報告』 白鳥良一(1980): 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』VII 宮城県多賀城跡調査研究所 富岡市教育委員会(1981): 『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』

内藤政恒(1964): 「須恵器利用の硯について」 『考古学雑誌』 50-1

(1963) : 「武蔵国分寺の円面硯」『史迹と美術』340

奈良国立文化財研究所

埋蔵文化財センター (1983.6):「陶硯関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース』41

樽崎彰一(1982): 「日本古代の陶硯-特に分類について-」 『考古学論考 小林行雄博士古稀記 念論文集』

丹羽 茂(1983):「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集

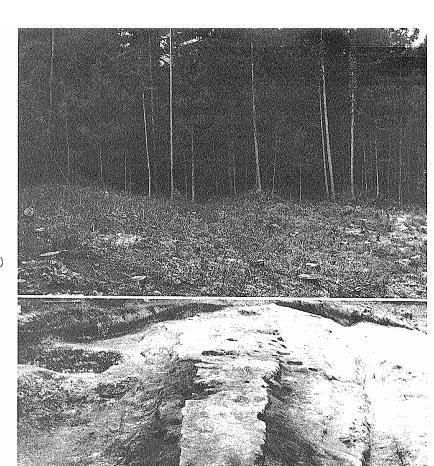
丹羽・小野寺・阿部(1981): 「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』V 宮城県文化財 調査報告書第77集

早坂・阿部(1980): 「西手取遺跡 手取遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅱ 宮城県文化 財調査報告書第63集

まんぎり会(1981): 『笹原』 米沢市埋蔵文化財調査報告書第7集 宮城県企画部土地対策課(1981): 『土地分類基本調査-古川』

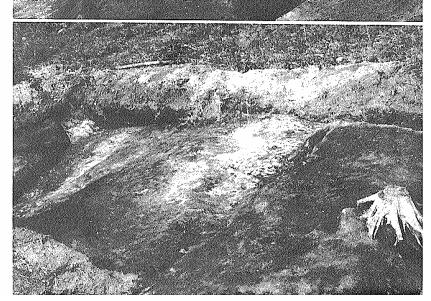
森 貢喜(1983):「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』VⅢ 宮城県文化財調査報告書第93集

# 写 真 図 版



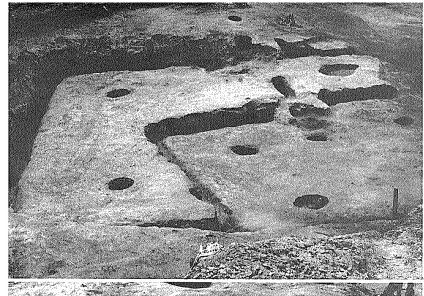
1.発掘前 (内側から第1築地 第2築地 土塁)

#### 2. 第1築地

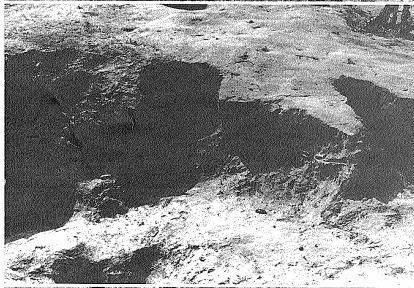


3. 第2築地

図版 1



1. 第5・4号 住居跡



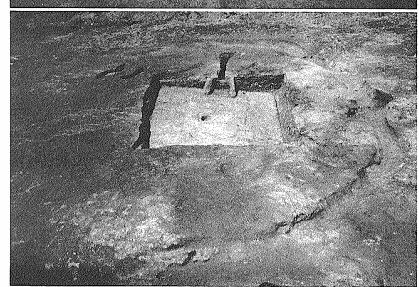
2. 第5号 住居跡



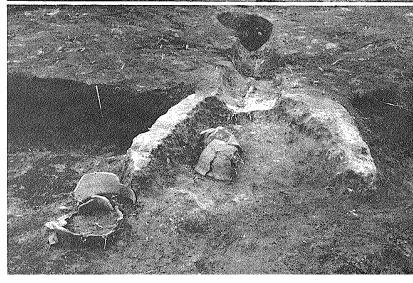
3. 第5号 住居跡壁柱穴 図版2



1.第20号 住居跡と外周溝

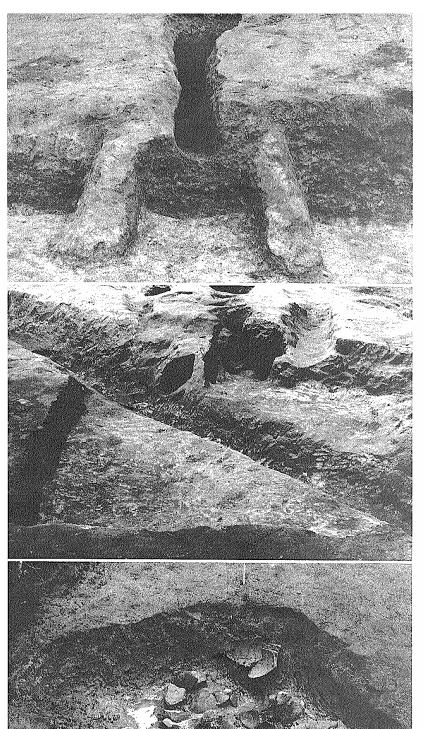


2. 第21号 住居跡と外周溝



3. 第21号 住居跡カマド

図版 3

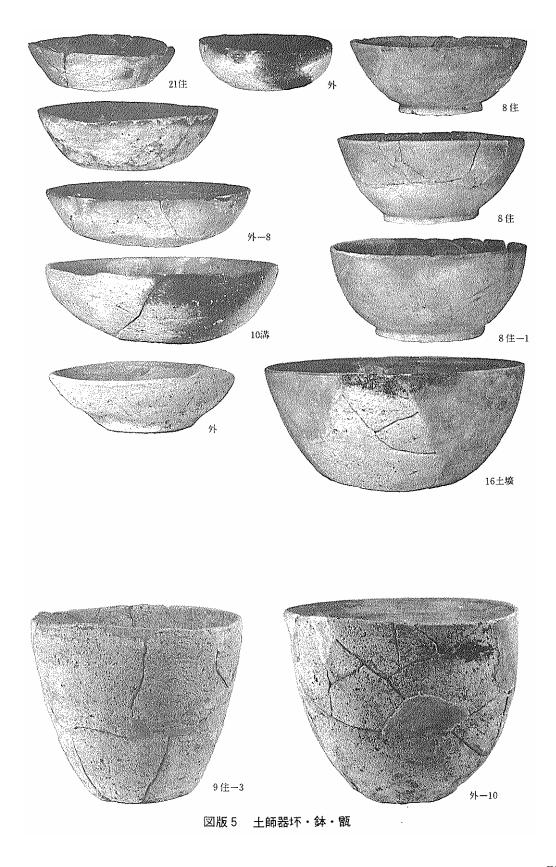


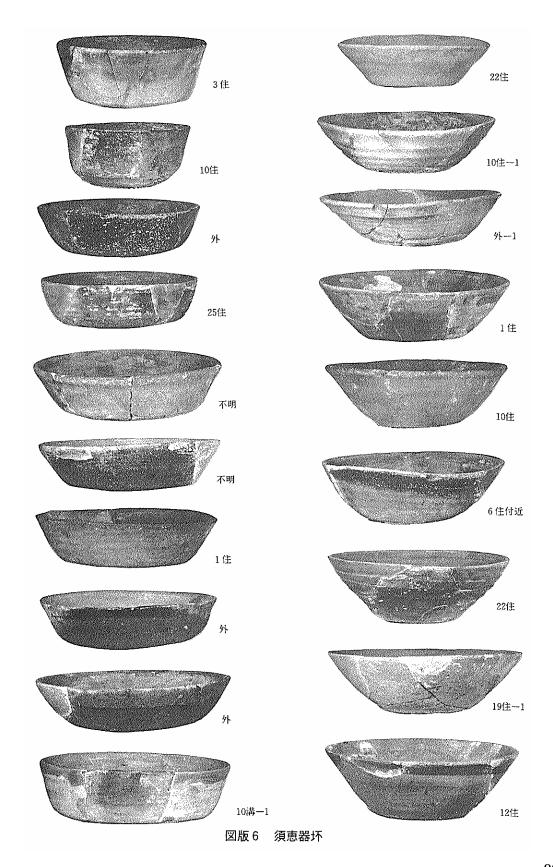
1. 第17号 住居跡カマド

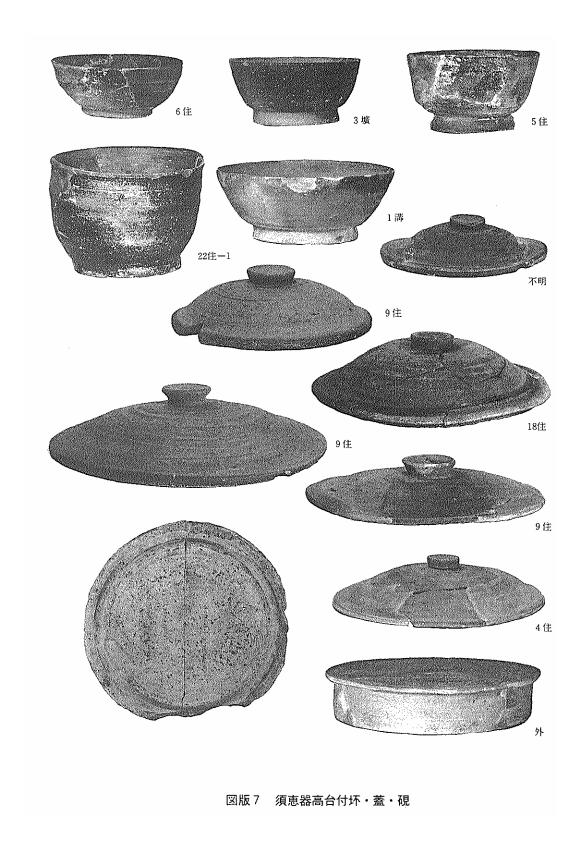
2.第1号 竪穴遺構

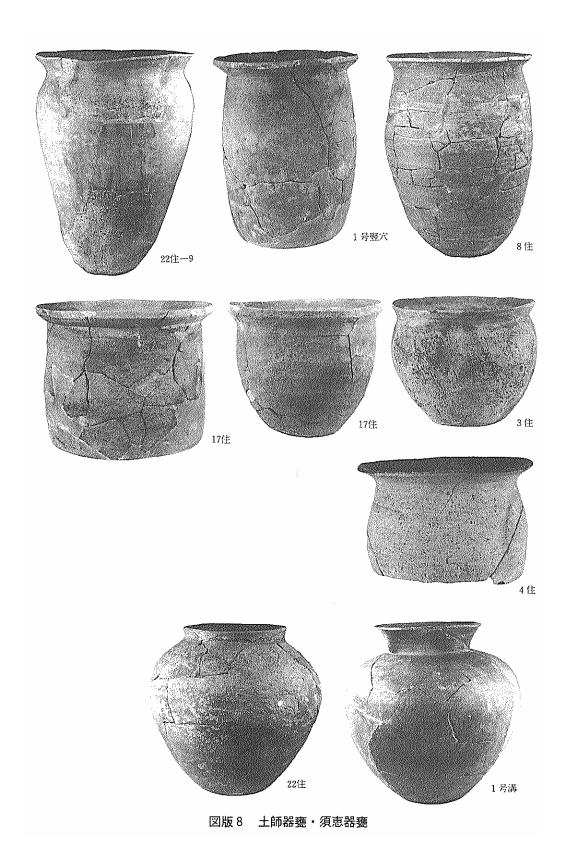
3. 第22号土壙

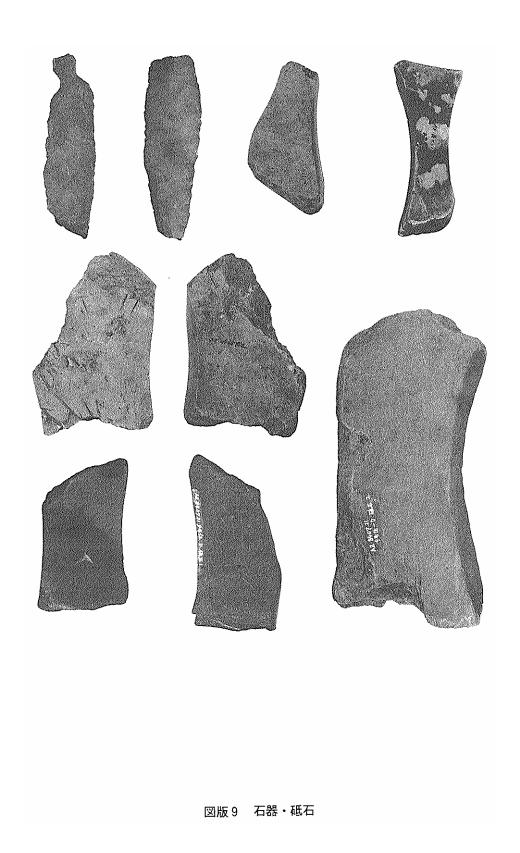
図版 4











朽木橋横穴古墳群

## 1.遺跡の位置

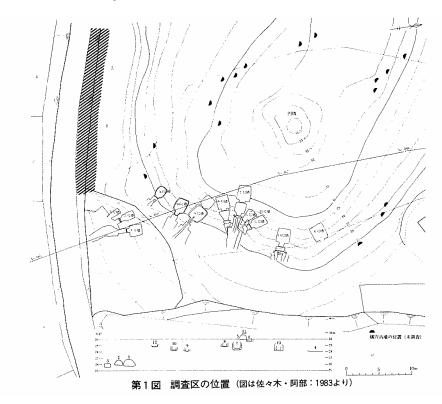
朽木橋横穴群は古川市役所の北方約6kmの古川市長岡に所在する。遺跡は古川市の北部丘陵 地帯の南端に位置する宮沢地区から長岡地区にのびる丘陵の東側に立地する。横穴古墳は丘陵 の南斜面から東斜面に約29基分布しており、昭和48年には13基の発掘調査が行なわれている。

### 2.調査概要

調査は化女沼ダム建設に伴う県道拡幅工事で斜面の一部が削られることになり、道路法面で 遺構の存在が予想された。調査は遺跡南東端の約40m(用地幅杭№0~№2)で1号~3号の立地 する斜面の裾部にあたる。

法面の地層は4層認められ、1層は現表土、2層は積土、3層は旧表土、4層は地山である。道路 法面の調査の結果5ヶ所の墓道が確認された。墓道はいずれも2層から掘り込まれている。その形 状は第1図、第1表に示した。

遺構は2号が1号を切っているが他の横穴の新旧関係は不明である。大きさは1号の形状が不明であるが、2~5号の横穴の墓道は1.5~2.3mの幅で断面が逆台形をしているものと逆アーチ形をしているものがある。



遺物は3号の堆積土中から須恵器甕の口縁部破片と土師器坏の体部破片が出土している。これらの遺構は昭和48年に調査した横穴にみられた羨道に連続していく墓道と同じ遺構と考えられる。遺構の年代は調査面積が部分的であることから、以前に調査した横穴の使用期間は7世紀末~9世紀としていることで、この年代の幅の中に考えておきたい。

